田原本町埋蔵文化財
調査年報
1999年度

9

2000

田原本町教育委員会

例　　言

1．本年報は、田原本町教育委員会が1999年度（平成11年度）に実施した発掘調査及び試掘調査・立会調査の概要である。発掘調査については、重要な成果が得られたものについて別途、その概要報告書を作成中である。
2．発掘調査は、本文第２表にまとめたように受託事業については原因者に、国庫補助事業については土地所有者に多大な理解と協力を賜った。
3．本文に記載された遺構の記号については、SD が溝を、SK が土坑を、SR が河川跡を表す。
4．遺物量は、幅34㎝、奥行き54㎝、深さ15㎝のコンテナに収納した際の箱数で表す。
5．本文で記載された弥生土器の時期は、藤田三郎・松本洋明1989「大和地域」『弥生土器の様式と編年　近畿編Ⅰ』（木耳社）による。
6．調査、遺物整理にあたって、秋山浩三、石野博信、今津節生、金関 恕、河上邦彦、佐原 真、寺沢 薫、難波洋三、樋口隆康、宮本長二郎、森 浩一諸氏より多大なご教授を賜った。記して感謝の意を表します。
7．本文の執筆は各調査担当者があたり、編集は清水琢哉が行った。

目　　次

Ⅰ．1999年度の概要……1
Ⅱ．発掘調査の概要
(1)　唐古・鍵遺跡　第73次調査……5
(2)　唐古・鍵遺跡　第74次調査……6
Column 1　弥生時代中期初頭の大型建物跡……7
Column 2　鹿角を利用した斧柄……8
Column 3　唐古・鍵ムラの古墳時代……9
(3)　唐古・鍵遺跡　第75次調査……10
Column 4　唐古・鍵ムラを囲む東側の環濠……11
(4)　唐古・鍵遺跡　第76次調査……12
(5)　唐古・鍵遺跡　第77次調査……13
Column 5　楼閣絵画土器のもう一つの建物……14
Column 6　破砕された銅鐸片……15
(6)　唐古・鍵遺跡　第78次調査……16
(7)　清水風遺跡　第４次調査……17
(8)　保津・宮古遺跡　第24次調査……18
(9)　保津・宮古遺跡　第25次調査……19
(10)　保津・宮古遺跡　第26次調査……20
Column 7　埴輪を利用した棺……21
(11)　宮古北遺跡　第９次調査……22
(12)　宮古北遺跡　第10次調査……23
(13)　笹鉾山古墳　第２次調査……24
Column 8　二重の周濠をもつ前方後円墳……25
(14)　笹鉾山古墳　第３次調査……26
Column 9　古墳を祀る……27
(15)　羽子田遺跡　第17次調査……28
(16)　十六面・薬王寺遺跡　第16次調査……29
(17)　薬王寺東遺跡　第２次調査……30
(18)　常楽寺推定地　第４次調査……31
(19)　法貴寺斎宮前遺跡　第２次調査……32
(20)　富本遺跡　第１次調査……33
(21)　金剛寺遺跡　第５次調査……34
(22)　田原本寺内町遺跡　第５次調査……35
(23)　平野氏陣屋跡　第11次調査……36
(24)　平野氏陣屋跡　第12次調査……37
Ⅲ．試掘調査・立会調査の概要……38

Ⅰ．1999年度の概要

1999年度の田原本町における発掘調査は24件で、これまでで最も多い発掘件数となった。その内訳は、個人住宅等や農業用倉庫等に伴うものが10件、民間開発に伴う受託事業が５件、公共事業に伴うものが６件、唐古・鍵遺跡等の範囲確認調査が３件である。

個人住宅等に伴うものは近年増加しているが、これは阪神大震災以降、耐震設計のため地盤改良されることが多くなったことが原因である。これらは件数のわりに小規模なものである。また、受託事業としては、小規模な分譲住宅開発や賃貸マンション等であり、ここ数年、同様の傾向を示している。この他、継続事業として、唐古・鍵遺跡の範囲確認調査が２件、本年度から新規として笹鉾山１号墳の範囲確認調査を１件実施した。

以下、時代を追って調査の成果をまとめておく。

縄文時代の遺跡の調査はないが、宮古北遺跡や清水風遺跡で縄文後期あるいは晩期の土器片が出土しており、付近に縄文遺跡の存在を窺わせている。ただし、これらの遺跡は小規模なものと考えられる。

弥生時代の遺跡の調査としては、唐古・鍵遺跡第73～78次調査の６件がある。いずれの調査においても重要な成果をあげている。第73次調査は分譲住宅開発に伴うもの、第74次調査は個人住宅建築に伴うもので、いずれも唐古・鍵遺跡の西地区に当たる部分であった。第74次調査では、唐古・鍵遺跡において初めて大型建物遺構を検出することになった。この建物跡は弥生時代中期初頭の総柱建物で、本構造としては弥生時代で最も古く、建築史上、重要な発見となった。また、第73次調査地でこの大型建物跡を区画すると考えられる大溝を検出している。この建物が唐古・鍵遺跡の西地区の中央に立地することから、唐古・鍵ムラが統合される以前の１つの中枢施設と考えられる。

第75・78次調査は、範囲確認調査として実施したものである。この２つの調査では、遺跡の東側環濠を確認することを目的として調査をおこない、弥生時代中期初頭に掘削された環濠を検出した。環濠は、その後、後期初頭と古墳時代前期には再掘削され、ムラが継続的に維持されていたこと、環濠がムラを巡ることが判明した。

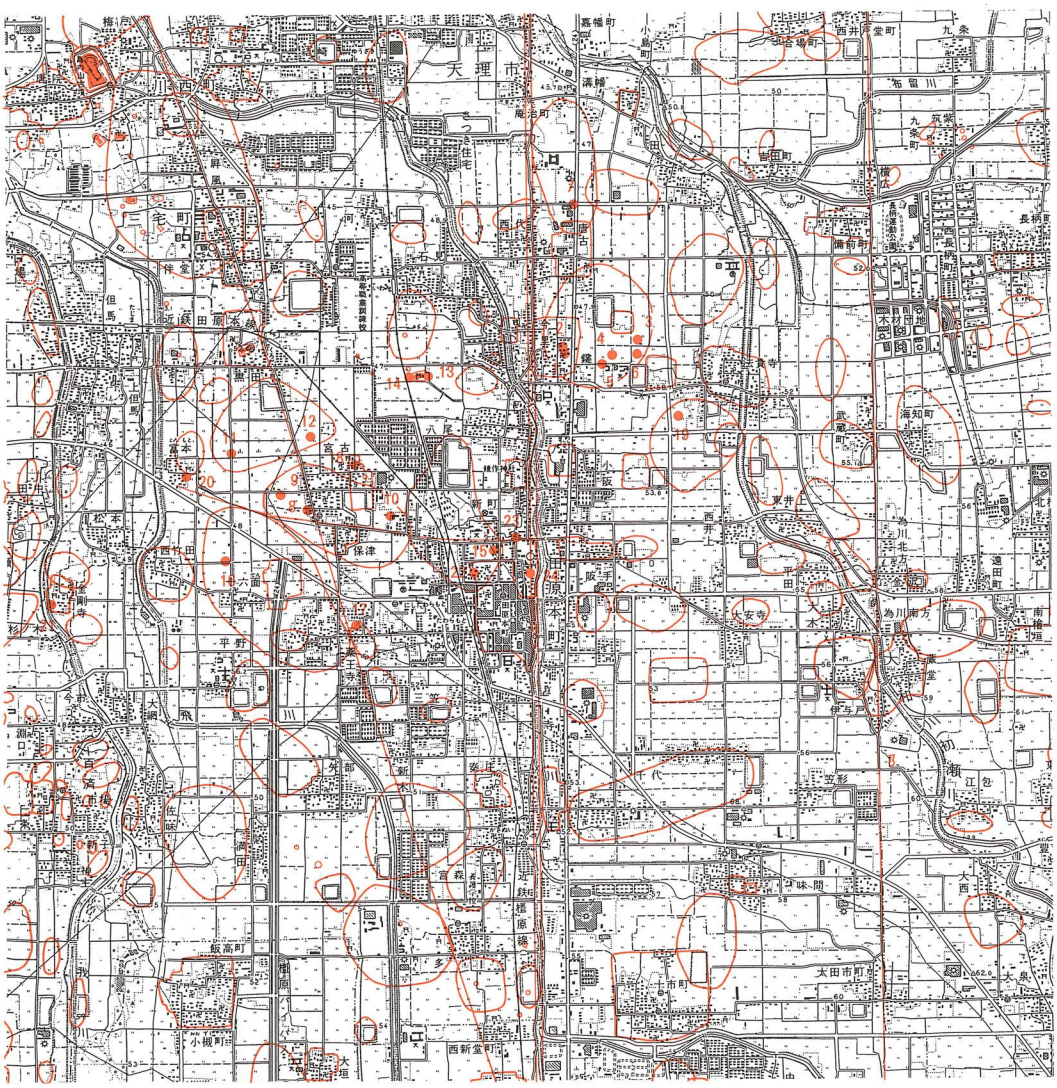
第76・77次調査は道路擁壁工事に伴うもので、南地区を東西150ｍ、南北100ｍにわたって調査を実施し、弥生時代中期以降の井戸や区画溝を検出した。特に重要な出土品として、第77次調査で出土した銅鐸の破片と楼閣絵画土器と同一個体の絵画土器片がある。銅鐸片は、唐古・鍵遺跡では、初めての資料であるが、第65次調査区で検出した青銅器の工房区と隣接しており、その形状から鋳潰す原料にされたものと考えられる。また、楼閣絵画土器にはさらに別の建物が描かれていたことも判明した。

古墳時代の遺跡の調査としては、古墳の調査において成果がみられた。前述唐古・鍵遺跡の第76・78次調査がある。第76次調査では、前年度の第72次調査地の東側を調査し、前方後円墳の周濠を確認した。周濠からは木柱や鳥形木製品が出土した。また、第78次調査では６世紀の円墳らしき周濠を検出したが、これ以外にも４世紀末～５世紀前半にかけての埴輪が散在しており、付近に当該時期の古墳の存在を窺わせ、「唐古・鍵古墳群」を想定できるような状況になってきた。

古墳の範囲確認調査として、笹鉾山１号墳の調査を実施した。本墳は、二重周濠を有する前方後円墳として推定されていたもので、周濠の有無や古墳の規模を確認する目的で後円部側で第３次調査を実施した。この調査と前後して前方部側を第２次調査として行い、二重周

第１表　田原本町における埋蔵文化財発掘届・通知一覧表

	発掘届 57条の２	発掘通知 57条の３	98条の２		発　掘	試　掘	立　会	計
1999年度 (平成11年度)	29	町７ 県３	26	通知文	24		15	39
				実施分	町24 県１	1	8	



田原本町の遺跡と発掘調査地点

第2表　1999年度発掘調査一覧表

	遺跡名	調査次数	調査地	原因者	原因	調査期間	調査面積	時期	調査担当	備考
1	唐古・鍵	第73次	田原本町鍵283-6	葛城木材産業株式会社	分譲住宅の建築	1999. 4. 12 ～4. 28	120㎡	弥生	豆谷和之	受託事業
2	唐古・鍵	第74次	田原本町鍵297他	松井宏敏	個人住宅の建築	1999. 7. 14 ～12. 25	368㎡	弥生・古墳・中世	豆谷 清水琢哉	国庫補助事業
3	唐古・鍵	第75次	田原本町鍵214	田原本町	範囲確認調査	2000. 1. 6 ～3. 27	320㎡	弥生・古墳	豆谷	国庫補助事業
4	唐古・鍵	第76次	田原本町鍵 181-1他	田原本町	農道整備	2000. 1. 13 ～3. 21	236㎡	弥生・古墳	藤田三郎 清水	産業振興課
5	唐古・鍵	第77次	田原本町鍵171-1 南側里道他	田原本町	通学路整備	2000. 1. 21 ～3. 21	230㎡	弥生	藤田	建設課
6	唐古・鍵	第78次	田原本町鍵202-1	田原本町	範囲確認調査	2000. 2. 3 ～3. 31	225㎡	弥生	豆谷	国庫補助事業
7	清水風	第4次	田原本町唐古 296-1東側国道	田原本町	下水道工事	2000. 2. 14 ～3. 3	25㎡	縄文・弥生 中世	藤田・豆谷・清水	下水道課
8	保津・宮古	第24次	田原本町宮古 22-2	石橋信一郎	個人住宅の建築	1999. 4. 22 ～4. 24	10㎡	中世	清水	国庫補助事業
9	保津・宮古	第25次	田原本町宮古 136-4	石橋亦史	農業用倉庫の建築	1999. 8. 2 ～8. 4	25㎡	古代・中世	清水	国庫補助事業
10	保津・宮古	第26次	田原本町新町 190-21	細山商事株式会社	分譲住宅の建築	1999. 10. 29 ～11. 26	290㎡	弥生・古墳 古代	清水	受託事業
11	宮古北	第9次	田原本町宮古 395-1	市民生活協同組合ならコープ	地下重油タンク埋設	1999. 5. 25 ～6. 1	56㎡	古墳・中世	豆谷	受託事業
12	宮古北	第10次	田原本町宮古 529-1南側水路他	田原本町	農業用水路の改修	1999. 12. 1 ～12. 16	230㎡	縄文・古代 中世	清水	産業振興課
13	笹鉾山古墳	第2次	田原本町八尾 259-1他東側里道	田原本町	道路整備	1999. 11. 18 ～00. 1. 18	163㎡	弥生・古墳 奈良	藤田	建設課
14	笹鉾山古墳	第3次	田原本町八尾 258-1、259-1	田原本町	範囲確認調査	1999. 11. 22 ～00. 2. 4	291㎡	弥生・古墳 奈良	藤田	国庫補助事業
15	羽子田	第17次	田原本町369-1、369-2、369-3	土堤政数	個人住宅の建築	1999. 11. 15 ～11. 16	30㎡	近世	豆谷	国庫補助事業
16	十六面・薬王寺	第16次	田原本町十六面 122-1	上田和利	個人住宅の建築	2000. 1. 25 ～2. 2	60㎡	中世	清水	国庫補助事業
17	薬王寺東	第2次	田原本町薬王寺 58	藤井　拡	共同住宅の建築	1999. 5. 17 ～5. 31	195㎡	古代・中世	清水	受託事業
18	常楽寺推定地	第4次	田原本町宮古 288-2、-4	川嶋昭子	共同住宅の建築	1999. 10. 25 ～10. 28	48㎡	近世	清水	受託事業
19	法貴寺斎宮前	第2次	田原本町法貴寺 893-1他北側水路	田原本町	農業用水路の改修	1999. 12. 10 ～12. 11	200㎡	弥生・中世	豆谷	産業振興課
20	富本	第1次	田原本町富本192	片岡太郎右衛門	農業用倉庫の建築	1999. 6. 9 ～6. 11	34㎡	中世	清水	国庫補助事業
21	金剛寺	第5次	田原本町金剛寺 435-1-1他	吉岡幸二	個人住宅の建築	1999. 7. 1 ～7. 5	35㎡	中世	清水	国庫補助事業
22	田原本寺内町	第5次	田原本町字坊ヤシキ325、326	小林敏良・絹枝・毅	個人住宅の建築	1999. 6. 14 ～7. 1	143㎡	近世	豆谷 清水	国庫補助事業
23	平野氏陣屋跡	第11次	田原本町新町 269-2	藤井環善	個人住宅の建築	1999. 4. 28 ～4. 30	6㎡	中世・近世	清水	国庫補助事業
24	平野氏陣屋跡	第12次	田原本町830-2、831-3	山本雅俊	個人住宅の建築	1999. 11. 17 ～11. 18	16㎡	近世	豆谷	国庫補助事業

濠を検出し、ほぼ古墳の規模を把握した。

また、保津・宮古遺跡第26次調査では6世紀の方墳の周濠と中世に投棄された形の5世紀の円筒棺の一部が出土し、隣接する羽子田古墳群と共有する遺跡として認識でき、古墳群の性格を考えるうえで重要な調査となった。この他、宮古北遺跡第9次調査では古墳時代前期の集落の一部を調査した。

古代の調査としては、宮古北遺跡第10次調査と保津・宮古遺跡第25次調査があるが、遺構遺物は少ない。前述笹鉾山1号墳の調査においても奈良時代の遺構遺物が検出されている。この調査では、墨書土器や緑釉陶器などが出土しており、古墳を利用した古代遺跡の存在が推定できる。また、薬王寺東遺跡第2次調査では、筋違道の道路側溝の可能性のある遺構が検出された。

中世・近世の主要な調査しては、金剛寺遺跡第5次調査や寺内町遺跡第5次調査がある。金剛寺遺跡は小規模な調査であったが、金剛寺城の西側の濠跡と推定される遺構を確認した。寺内町遺跡遺跡の調査では、中世から近世の屋敷地を調査し、井戸や大溝、建物跡を確認し屋敷の構造と変遷をとらえることができた。

また、平野氏陣屋跡の第12次調査では、絵図にない大溝を確認しており、絵図の年代や大溝の性格が問われそうである。

（藤田）

Ⅱ．発掘調査の概要

(1) 唐古（からこ）・鍵（かぎ）遺跡 第73次調査

所 在 地　田原本町大字鍵字垣内283－6
調査原因　分譲住宅の建築
調査期間　1999.4.12～4.28
調査面積　120㎡
担 当 者　豆谷和之
遺 物 量　94箱

位置・環境　唐古・鍵遺跡は、標高48m前後の沖積地に立地する弥生時代を代表する環濠集落である。その占有面積は約30万㎡に達する。

今回の調査地は遺跡の南西部にあたり、周辺部では過去に第58・71次の2件の調査を実施している。これらの成果から本調査地では、唐古・鍵遺跡の西地区内部を区画する溝群が検出されると予想された。

検出遺構　弥生時代前期：溝1条、土坑1基他
弥生時代中期前半：大溝4条、土坑5基
弥生時代中期後半：溝2条
弥生時代後期：土坑1基

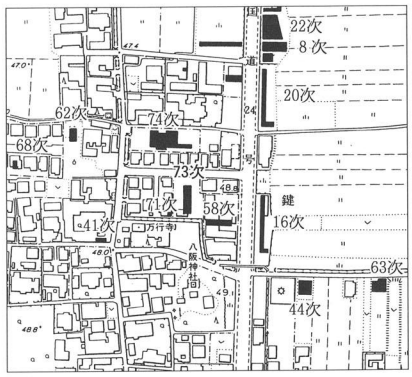
中期前半の大溝4条が、集落内部の区画溝になると考えられる。前期の溝は、細く浅いもので埋没後、前期の土坑が掘り込まれている。後期の土坑は、井戸である。

出土遺物　弥生時代前期の溝から、唐古・鍵遺跡では古く位置づけられる前期弥生土器とともに、広鍬の製品が出土した。

調査区北端で検出した弥生時代中期前半の大溝からは、無文広口壷や櫛描文広口壷がほぼ完形で出土している。

弥生時代後期の土坑では、下層上面から広口壷の完形品2点、上層から半完形土器群が出土している。

ま と め　今回は、唐古・鍵遺跡の西地区内部の調査である。弥生時代中期前半の大溝4条を検出し、本調査地が西地区内部を区画する溝群の区域であることを確認した。大溝はいずれも弥生時代中期後半までには埋没していた。



1．調査地点の位置　（1：5,000）

2．調査地全景（北から）

3．SD－201遺物出土状況（北から）

(2) 唐古・鍵遺跡 第74次調査

所 在 地　田原本町大字鍵字垣内297他
調査原因　個人住宅の建築
調査期間　1999.7.14～12.25
調査面積　368㎡
担 当 者　豆谷和之・清水琢哉
遺 物 量　120箱

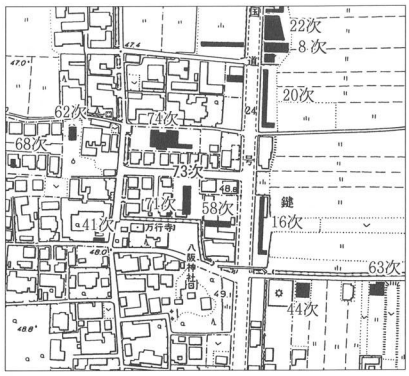
位置・環境　本調査地は、前掲の第73次調査地より北に約20mの地点である。遺跡西地区内部にあたり、周辺では第14・62・73次の3調査を実施している。本調査地の北東側で行われた第14次調査では、弥生時代中・後期の多数の柱穴や完形品を多く含んだ後期土坑を検出している。一方、本調査地の南側で行った第73次調査地では、大溝4条を検出した。このことから、本調査地を挟んで北側が居住域、南側が区画域と想定された。

検出遺構
弥生時代前期：土坑4基
弥生時代中期前半：大型建物跡1棟、土坑1基
弥生時代中期中葉：溝1条、土坑2基
弥生時代中期後半：土坑4基
弥生時代後期：土坑7基
古墳時代前期：方形周溝
中世・近世：大溝3条、素掘小溝

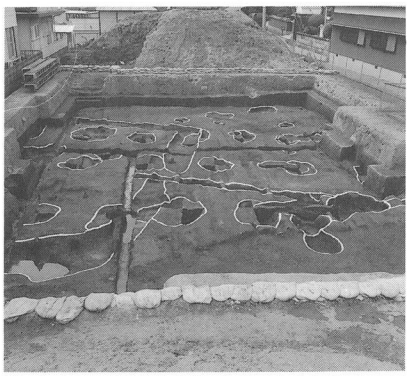
出土遺物　弥生時代後期の井戸から多数の完形土器が出土している。特殊遺物として、水晶小玉1、ヒスイ小玉1、ガラス小玉1、管玉2、磨製石戈1、磨製石剣3、戈形木製品1がある。

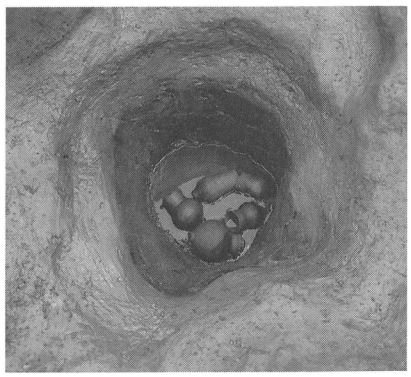
まとめ　本遺跡において、初の大型建物跡を検出した。弥生時代中期初頭の総柱で独立棟持柱をもつ構造である。現在知られている大型建物跡の中では、最も古く位置づけられる。

本調査地では、弥生時代前期から古墳時代前期までの井戸等の遺構を検出したが、唐古・鍵遺跡における居住区内の状況としては、比較的疎といえる。また、庄内期の方形周溝墓（？）は、唐古・鍵遺跡の変遷を考えていくうえで重要である。中世においては、「唐古南」氏居館関係の大溝が検出された。



1．調査地点の位置　（1：5,000）


2．調査地全景（東から）


3．SK－119土器出土状況

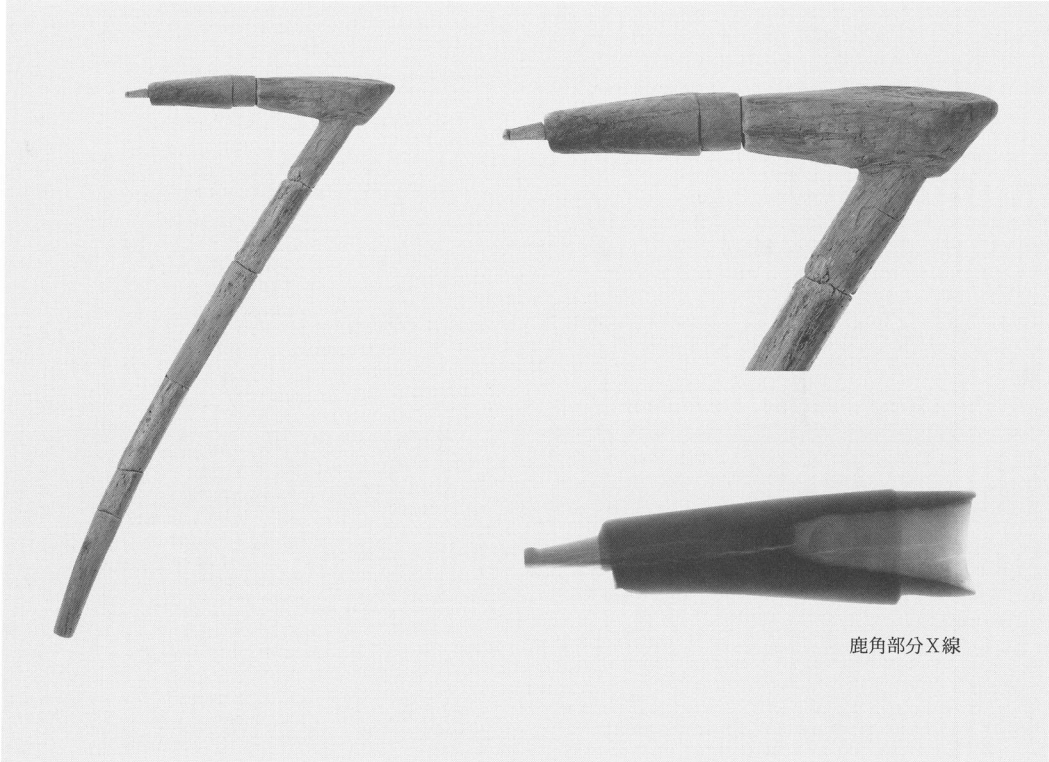
Column 1

唐古・鍵遺跡
第74次

弥生時代中期初頭の大型建物跡

第74次調査では、大型建物跡を検出したことが特筆される。大型建物跡は南北棟で、梁行２間の7.0m、桁行５間以上の11.4m以上の規模をもつ。北側妻部は確認しているが、南側妻部は確認しておらず、調査区外へさらに建物が延びる可能性がある。また、建物中央の棟通りに３基の柱穴を検出しており、総柱型掘立柱建物になると考えられる。北妻側の柱通りより外側、建物棟通り延長位置に単独の大型柱穴を検出しており、独立棟持柱と考えられる。柱穴の掘り方平面形はほとんどが長楕円形を呈し、長軸2.0m、短軸1.0mと大きい。15基の柱穴のうち、３基に直径60cmの柱が残存し、棟持柱はヤマグワ、他はケヤキ材を使用していた。

大型建物跡は、その柱穴が弥生時代前期（大和Ⅰ－２～Ⅱ－１様式）の大溝を切り込み、弥生時代中期中葉（大和Ⅲ－１様式）の小溝に切り込まれる。さらに、柱穴内から出土するのは、弥生時代中期初頭（大和Ⅱ－２様式）の土器であり、柱抜き取り穴からは、弥生時代中期初頭（大和Ⅱ－３様式）の土器が出土する。よって、大型建物を弥生時代中期初頭のものと位置付けることができる。



鹿角部分X線

Column ②

唐古・鍵遺跡
第74次

鹿角を利用した斧柄

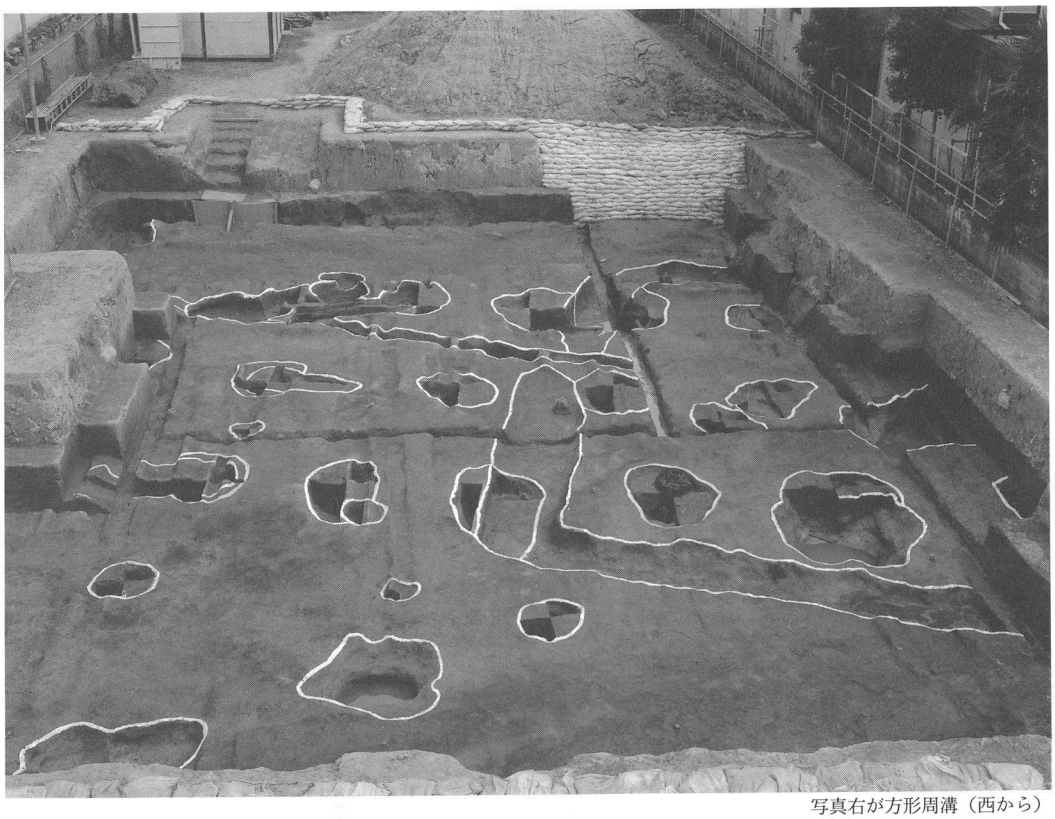
鹿角製間接具付膝柄横斧は、弥生時代中期中葉（大和Ⅲ－２様式）の井戸SK-113から出土した。SK-113は平面が楕円形を呈し、長軸1.8ｍ、短軸1.2ｍ、深さ1.75ｍを測る。鹿角製間接具付膝柄横斧は、最下層より出土した。この他の特殊な遺物として、下層から戈形木製品や頸部につるを巻き付けた広口壷が出土している。

鹿角製間接具付膝柄横斧は、全長39㎝を測る（各部位数値は右表参照）。斧台は先端が一段低められ、装着部を作り出す。そこには鹿角製間接具が装着される。間接具の先端は一段低められ、断面半円形の有頭部が作り出される。下側の平坦部が斧身装着面となる。また、斧柄との装着側も幅1.3㎝が一段低められる。

	握り部	斧台		鹿角
		（装着部含まず）	（装着部）	
長さ	35.6	8.5	2.8	7.7
最大幅		3.2		
最大径	1.9		1.4	2.0

単位：㎝

本例は突起状の装着部をもつ木製斧柄に関して、その装着素材を一考させる資料と言えよう。



写真右が方形周溝（西から）

Column 3

唐古・鍵遺跡
第74次

唐古・鍵ムラの古墳時代

唐古•鍵遺跡の調査において、古墳時代初頭の遺構遺物が各所で検出されている。そのひとつの中心が西地区である。第74次調査地の南半で、方形周溝の北半分と推定される遺構を検出した。本遺構の北側溝では、中央部分が浅くなっており、陸橋部を有していた可能性が高い。また、北東コーナー付近では、内面に朱の付着した甕や直口壷、加飾壷が出土した。これらの状況から、本遺構は方形周溝墓の可能性が高く、土器は供献土器と考えられる。時期は、庄内２式である。

唐古・鍵遺跡では、庄内から布留式にかけて弥生時代の環濠の一部を溝さらえあるいは、再掘削していることが判明しつつある。この西地区の北西側環濠（第13•42次）においても再掘削しており、弥生時代と同様に居住区が拡がっていた可能性がある。今回検出された遺構が方形周溝墓とすれば、居住区と墓が近接することになり、当期の集落構造を考える上で重要になろう。

(3) 唐古・鍵遺跡 第75次調査

所 在 地　田原本町大字鍵字田楽田214
調査原因　範囲確認調査
調査期間　2000.1.6～3.27
調査面積　320㎡
担 当 者　豆谷和之
遺 物 量　36箱

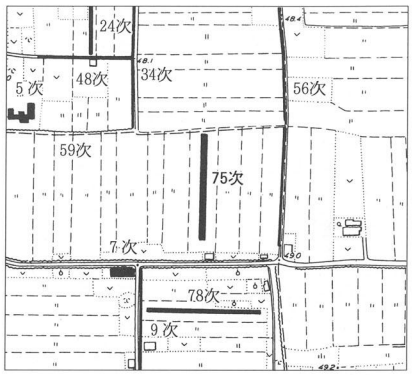
位置・環境　今回の調査地の周辺部では、過去に第7・9・56次の3件の調査が行われている。本調査地より南側の第7・9次では環濠と考えられる大溝を、東側の第56次では河川跡を検出した。これらの調査により、本調査地周辺が弥生時代においては、集落東端の環濠帯にあたると予想された。

検出遺構　弥生時代中期：環濠1条、河川跡
弥生時代後期前半：環濠1条（再掘削）
弥生時代後期後半：環濠1条（再掘削）
古墳時代前期：小溝2条

今回検出した環濠は、弥生時代中期前半に掘削され、その走行方向に沿って後期前半と後期後半に再度掘削されている。最終堆積土は、布留0式土器を含んでいる。

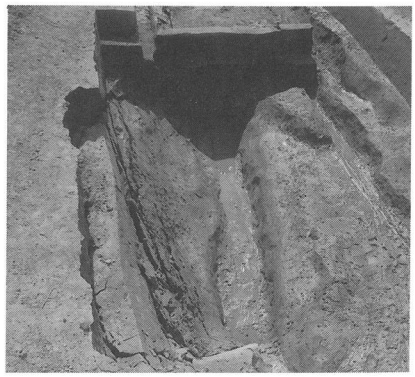
出土遺物　弥生時代中期の環濠は、下層上面から弥生時代中期前半（大和Ⅱ－3様式）の土器が出土した。弥生時代後期前半に再掘削された環濠内には、完形、半完形の土器群が流路方向に沿って埋没していた。

まとめ　今回検出した環濠は、弥生時代中期前半まで溯る。おそらく、弥生時代中期段階に最も内側にあったと推定される大環濠よりも外側の中期環濠である。この環濠は、東側を流れる弥生時代の河川跡との関係から、唐古・鍵遺跡中期集落の東端を示すものと考えられる。また、本環濠は幾度かの再掘削を経て、古墳時代初頭まで開口しており、集落端を画する溝としての意識が弥生時代中期前半から古墳時代初頭まで連綿と生き続けていたのであろう。



1．調査地点の位置　（1：5,000）

2．調査地全景（北から）


3．SD－101C完掘状況（北から）

写真左が北

Column 4

唐古・鍵遺跡
第75・78次

唐古（からこ）・鍵（かぎ）ムラを囲む東側の環濠

第75次調査と第78次調査によって、唐古・鍵遺跡の東端部の様相が明らかになりつつある。

第75次調査で検出した大溝SD－101と第78次調査で検出した大溝SD－109は、方向や堆積土、遺物の出土状況から一連のもので、弥生時代後期初頭の環濠になると考えられる。これらの大溝は再掘削されたもので、前身の大溝（第75次SD－101C・78次SD－109B）が下層で検出された。SD－109Bは東肩のみの検出で規模は不明であるが、SD－101Cは検出面で幅約2.4m、深さ1.5mを測る。よくしまった灰色粘土の堆積土中には遺物が少ないが、SD－101Cでは下層上面から弥生時代中期前半（大和Ⅱ－2様式）の壷や無頸壷が出土した。

唐古・鍵遺跡の東側は調査次数が少なく、東側の環濠については不明な点があった。また、遺跡内部の調査において東方より流れ込む弥生時代中期の砂層を検出することがあり、遺跡東側では環濠が途切れている可能性も想定された。しかし、今回遺跡の東側で約50m離れて設定した第75次と第78次調査において、弥生時代中期の大溝を検出し、それらが連なって環濠になることが判明したことは大きな成果といえる。

(4) 唐古・鍵遺跡 第76次調査

所 在 地　田原本町大字鍵字神子田181－1他
調査原因　農道整備
調査期間　2000.1.13～3.21
調査面積　約236㎡
担 当 者　藤田三郎・清水琢哉
遺 物 量　210箱

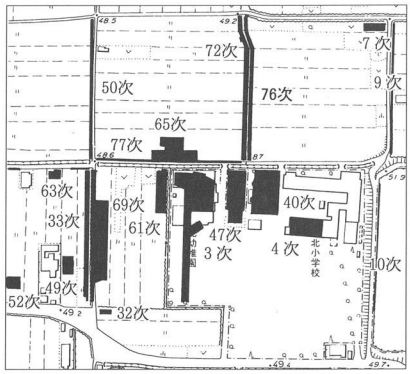
位置・環境　今回の調査地は、遺跡の東南部にあたる。農道整備にあたり昨年度は西側水路部分を第72次として調査をおこない、今回は道路東側擁壁部分を調査した。本地の南側において過去に第3・40・47・65次の各調査を実施し、唐古・鍵ムラの環濠から居住区にかけての地域であることが判明している。

検出遺構　弥生時代前期：土坑1基、
弥生時代中期前半：大溝4条、土坑5基
弥生時代中期後半：溝6条
弥生時代後期：大溝3条、土坑1基
古墳時代前期：土坑2基
古墳時代後期：前方後円墳、円墳周濠

調査区の北端と南端で弥生時代中期の大溝を、南端では後期の大溝を検出した。後期の大溝は南々西から北々東に走行し環濠と考えられる。調査区全域で中後期の土坑や小溝が散在しており、密集度は低いが居住区の様相を呈している。また、布留期の井戸2基は南半で、古墳の周濠は北端から中央で検出した。円墳と推定される周濠は重複している。

出土遺物　遺物は、弥生時代前期から古墳時代前期までの土器が主体を占めるが、なかでも後期初頭の土器が多い。木製品や獣骨や種子類は少ない。北端の井戸からは、下層より完形の短頸壷2点が出土している。古墳周濠からは、鳥形や長さ2.5mの柱やほぞ穴のあいた柱が埴輪とともに出土した。

ま と め　今回の調査では、第72次調査で検出した溝等は一連のものであった。また、井戸が多く検出され居住区であることが判明した。新たに円墳周濠1条を検出した。古墳は重複しており、時期的な変遷が問題となる。



1．調査地点の位置　（1：5,000）

2．調査地全景（北から）

3．SD－1106土器出土状況

(5) 唐古（からこ）・鍵（かぎ）遺跡 第77次調査

所 在 地　田原本町大字鍵171－1南側里道他
調査原因　通学路整備
調査期間　2000.1.21～3.21
調査面積　230㎡
担 当 者　藤田三郎
遺 物 量　約125箱

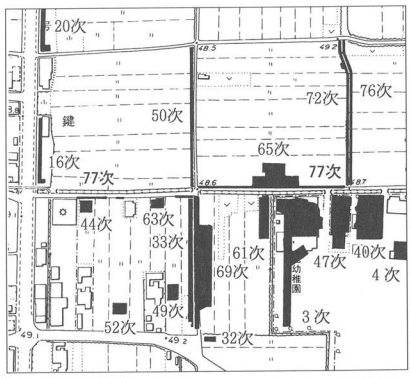
位置・環境　調査地は、遺跡南部を東西に横断する形で延長150mに及んでいる。したがって、近隣では多くの調査を実施しており、第3・33・44・47・50・61・63・65次調査がある。これらの調査では、南地区を囲む北側の大溝群を各所で検出している。今回の調査ではそれら一連の遺構が検出されることが予想された。

検出遺構　弥生時代中期前半：大溝1条、土坑1基
弥生時代中期中葉：大溝1条、土坑2基
弥生時代中期後半：土坑4基
弥生時代後期：土坑6基、方形周溝

調査区は4つに分かれ、西から第1～4トレンチとなる。第1・3トレンチでは、東南東から西北西方向の弥生時代中期大溝各1条、第4トレンチでは、東南から西北方向の弥生時代中期大溝条を検出した。各トレンチとも土坑は少ない。第4トレンチでは、第65次調査で検出した方形周溝の延長を確認し、2基分存在することが判明した。また、東端では、後期後半の井戸を検出した。

出土遺物　遺物は、土器が主体となる。第3トレンチの大溝から骨製刺突具・横杓子・打製石剣などが出土した。第4トレンチの後期初頭の大溝や後期後半の土坑からは、土製鋳型外枠が出土した。また、特筆すべき遺物として、銅鐸破片と楼閣絵画土器と同一個体の絵画土器片がある。

ま と め　今回の調査では、これまでの調査で検出した溝群の延長を確認することができた。いずれのトレンチにおいても土坑が少なく、南地区の北端を区画する溝群地帯にあたることが判明した。また、後期後半には方形周溝墓の可能性がある溝を検出した。



1．調査地点の位置　（1：5,000）

2．調査地全景（東から）

3．SX－3101（大溝）遺物出土状況

1・2．第47次調査　3．第77次調査

Column 5

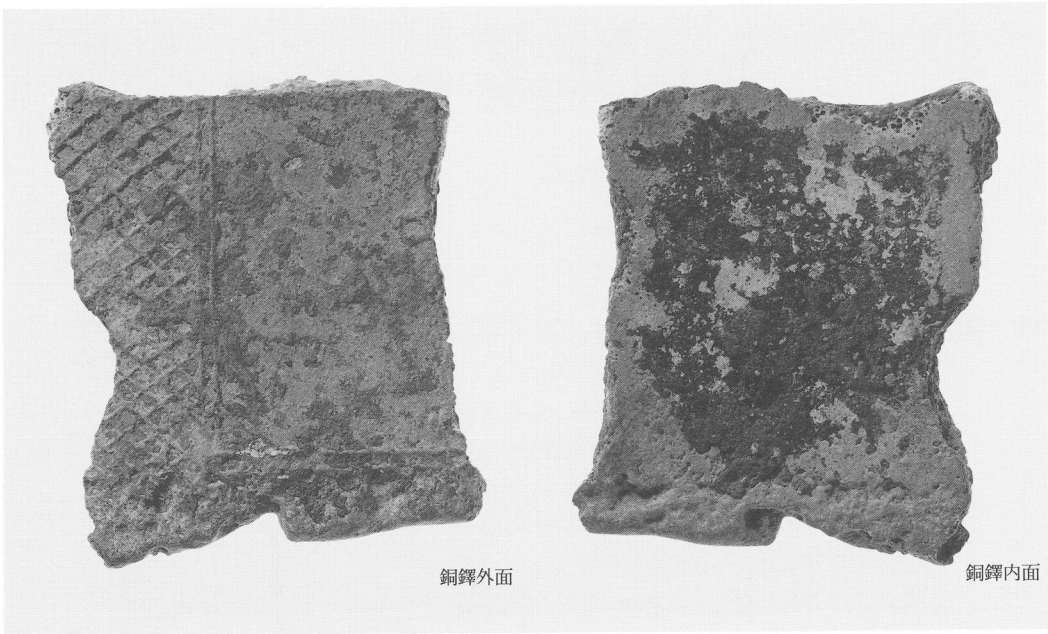
唐古・鍵遺跡
第77次

楼閣絵画土器のもう一つの建物

第77次調査の第４トレンチから第47次調査で出土した楼閣絵画土器と同一個体になる建物の絵画土器の破片が出土した。出土地点は、この第４トレンチの東半にあたり、ちょうど第47次調査で出土した楼閣絵画土器片とはおよそ20ｍほど北西側の地点になる。今回の破片は、南東から北西方向に走行する弥生時代後期初頭の溝から出土したもので、伴出土器は弥生時代中期後半から後期初頭の土器を含んでいた。

土器は１点のみで、およそ縦７㎝、横4.5㎝を計り、淡褐色を呈す。その位置は、壷胴部中央よりやや上のあたりに推定される。絵画は建物の下半部分で、一本線で３本の柱を表現し、その上に屋根に当たる部分を斜格子で表している。この斜格子は左端の柱で終わっており、寄棟の形態をとる。また、屋根の下線は左端で止まらず伸びていることから、渦巻状の飾りが付くと推定される。

これらのことから、楼閣絵画土器は楼閣単独で描かれているのでなく、形態の異なる複数の建物で構成された絵画土器であることが判明した。



Column 6

唐古・鍵遺跡
第77次

破砕された銅鐸片

第77次調査において銅鐸の破片が出土した。この第77次調査地の北側は1997年度に実施した第65次調査地で、青銅器鋳造の工房と推定され、炉跡や鋳型を検出している。今回出土した銅鐸片は、まさにこの範囲内から出土したものである。残念ながら、本遺物は、暗褐色土の上部遺物包含層から弥生時代中期後半から後期の土器片とともに出土したもので良好な出土状態を示すものでないが、工房に伴っていた遺物と考えて良かろう。

銅鐸片は、鐸身の中央あるいは左下部分で縦7.2㎝横６㎝ほどの方形を呈する小片である。外面には斜格文で充填された横帯と縦帯が各１帯あり、その方形区画内に「⊂」形部分で切れた意匠不明の絵画が存在している。このことから、絵画を有する袈裟襷文銅鐸と推定される。しかし、本銅鐸は次のことから鋳造に失敗した銅鐸で、スクラップにされた破片と推定される。１つは、本破片の左右辺と上辺は破断面であるが、下辺は横帯文様が不明瞭になり鋳造時の湯切れの状態で終わっていること。２つ目は、破片の厚さが９㎜と非常に厚いこと。これらの状況は、製品としての銅鐸にはみられない特徴であり、また、出土地点が青銅器の工房区内であることからすれば、鋳造に失敗した銅鐸を破砕し、原料として使われる可能性があった遺物と推定される。

唐古・鍵遺跡において初めて銅鐸が出土し、本遺跡で製作された銅鐸の一端が明らかになった。しかし、本破片の銅鐸鋳型および同范銅鐸については今のところ特定できておらず、今後の課題も多い。

(6) 唐古・鍵遺跡 第78次調査

所 在 地　田原本町大字鍵字狐塚202－1
調査原因　範囲確認調査
調査期間　2000.2.3～3.31
調査面積　225㎡
担 当 者　豆谷和之
遺 物 量　29箱

位置・環境　今年度の範囲確認調査として、第75次調査を行ったが、南北に長い調査区が環濠の走行方向に平行する形となった。結果、第75次調査区の北半部のほとんどが1条の環濠内であった。唐古・鍵遺跡の東縁辺部の地形を復元していくうえで、データーは充分に得られなかった。このため、第75次調査区の南50mで、環濠の走行方向に直交した東西に長い第78次調査区を設定した。

検出遺構　弥生時代中期：大溝（環濠）1条、河川跡
弥生時代後期前半：大溝（環濠）3条、溝3条、土坑2基
古墳時代後期後半：溝2条

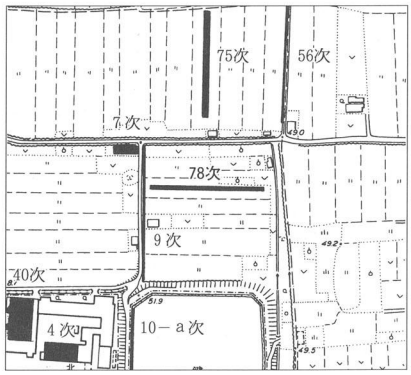
出土遺物　調査区東端の環濠からは、弥生時代後期前半の土器が、半完形、完形で出土している。

また、この環濠の東側には、2基（SK－102・103）の土坑があった。SK－102では、中・上層に多量の土器片が含まれていた。SK－103の下層上面からは、短頸壷と長頸壷が完形で出土した。

まとめ　今回の範囲確認調査（第75・78次）によって、遺跡東側を弥生時代中期前半の環濠が巡っていた可能性は高くなった。

本調査区の東端で検出した環濠と、第75次調査区で検出した環濠は一連のもので、遺跡が立地する微高地のその末端に掘り込まれ、遺跡東端を区画していたのであろう。それは、この環濠の東側に沿って弥生時代中期の河川跡が検出されていることからも肯定される。

なお、この弥生時代中期の河川跡は、第75次調査区を北流し、第1次調査の北方砂層へと連なる可能性が高い。



1．調査地点の位置　（1：5,000）

2．調査地全景（西から）

3．SK－102遺物出土状況

(7) 清水風遺跡（しみずかぜ） 第４次調査

所 在 地　田原本町大字唐古296－1東側国道他
調査原因　下水道工事
調査期間　2000.2.14～3.3
調査面積　25㎡
担 当 者　藤田三郎・豆谷和之・清水琢哉
遺 物 量　１箱

位置・環境　清水風遺跡は標高47ｍ前後の沖積地に立地し、田原本町大字唐古から天理市庵治町に所在する遺跡である。

今回の調査地は、遺跡の南部にあたる。北側約200ｍでは第１・２次調査が行われ、弥生時代中期後半の河川跡と集落、中・後期の方形周溝墓を検出している。また、東側隣接地では立会調査で弥生時代中期ごろとみられる河川堆積を確認している。清水風遺跡の弥生時代中期後半の河川跡は、唐古・鍵遺跡で検出されている北方砂層の延長と考えられており、本調査地周辺にもその河川跡が通っていると考えられる。

調査は、下水道マンホール掘削部分を対象としているため、直径1.5～2.5ｍのケーシングを打ち込んだ内部で行った。調査対象は９ヶ所である。

検出遺構　縄文時代：包含層
弥生時代：河川跡
中　　世：大溝、素掘小溝、土坑
近　　世：大畦畔、溝

出土遺物　縄文時代包含層からは、縄文時代晩期の土器片が出土した。また、弥生時代とみられる河道からは、弥生土器小片１点が出土するにとどまった。

ま と め　今回の調査では、それぞれが小面積での調査であり、面的な遺構の把握はほとんどできなかった。その中で、縄文時代晩期の包含層を検出したこと、清水風遺跡の河川跡の延長とみられる弥生時代の河道を検出したことは大きな成果であった。

1．調査地点の位置　（1：5,000）

2．Ｍ４完掘状況（北から）

3．Ｍ３柱穴半掘状況（南から）

(8) 保津（ほつ）・宮古（みやこ）遺跡 第24次調査

所 在 地　田原本町大字宮古字南西口22－2
調査原因　個人住宅の建築
調査期間　1999.4.22～4.24
調査面積　10㎡
担 当 者　清水琢哉
遺 物 量　1箱

位置・環境　保津・宮古遺跡は、田原本町大字保津および宮古に所在する遺跡である。これまでに、23次にわたる調査が行われており、縄文時代後期～中世にわたる各時代の遺構・遺物が検出されている。

今回の調査地は、遺跡の中央西寄りに位置する。北側隣接地では、第19次・第20次調査が行われている。このうち、第19次調査では鎌倉時代を中心とする遺構が検出されており、本調査地にもこの時期の集落が拡がることが予想された。

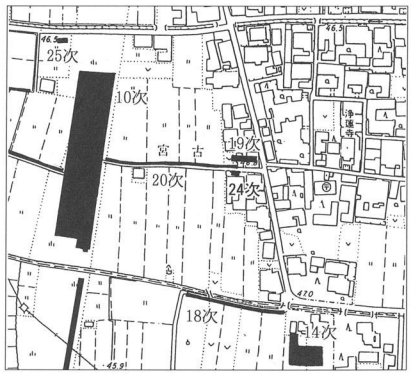
また、第20次調査では縄文時代後期の落ち込み状の遺構を確認しているが、これが本調査地まで及ぶ可能性が考えられた。

検出遺構　調査区の北東端で土坑1基を検出した。直径不明、深さ1m以上。井戸の可能性が考えられる。遺物から、鎌倉時代の遺構とみられる。また、調査区北西で柱穴1基を検出した。埋土から中世の遺構と考えられるが、遺物が少ないことから所属時期を明らかにすることはできなかった。

調査区全体で中・近世素掘小溝が検出された。東西方向2条、南北方向7条。東西方向の溝のうち1条は幅0.6mであるが、それ以外は幅0.2m前後である。また、南北方向の溝のうち2条は、埋土の状況から中世の可能性がある。

出土遺物　鎌倉時代の土坑からは、12世紀ごろの瓦器や桃の種などが出土している。

ま と め　今回の調査では、小面積の中で土坑1基、柱穴1基を検出した。鎌倉時代ごろの遺構とみられ、北側隣接地の第19次調査地点と同様に集落となっていたことが明らかとなった。



1．調査地点の位置　（1：5,000）

2．調査地全景（東から）

3．中世素掘小溝　土師皿出土状況

(9) 保津（ほつ）・宮古（みやこ）遺跡 第25次調査

所 在 地　田原本町大字宮古字坊ノ北浦136－4　**調査面積**　25㎡
調査原因　農業用倉庫の建築　**担 当 者**　清水琢哉
調査期間　1999.8.2～8.4　**遺 物 量**　1箱

位置・環境　今回の調査は、遺跡中央西で行われた。南東では第10次調査が、南西では第22次調査が行われており、弥生時代後期～古代の遺構が検出されている。しかし、第10次調査に先立つ試掘調査では、本調査地の東側隣接地で顕著な遺構を検出していない。また、第22次調査では北側部分の遺構が希薄となっていた。このことから、本調査地では遺構密度が低い可能性が考えられていた。

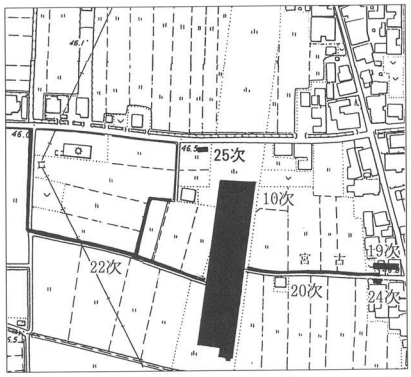
検出遺構　古代では、調査地東端で南北方向の溝1条を検出した。調査区外に拡がるため幅不明、深さ0.3mを測る。奈良時代の遺構とみられる。

中世では、調査地西端で南北方向の溝1条を検出した。調査区外に拡がるため幅不明、深さ0.15m。遺物が少なく、詳細な時期は明らかでない。

近世では、南北方向5条、東西方向5条の素掘小溝を検出した。幅0.2m前後、深さ0.1m前後。

出土遺物　古代の溝から奈良時代の須恵器平瓶や土師器坏などが出土した。

ま と め　今回の調査では、奈良時代の遺構が検出された。第10次・22次調査でも当該期の遺構は検出されているが、遺構密度が本調査地に向かって低くなる傾向があった。今回検出された遺構の性格は明らかでないが、本調査地で奈良時代の遺構の拡がりが確認されたことは1つの成果であった。



1．調査地点の位置　（1：5,000）

2．調査地全景（東から）

3．古代の溝遺物出土状況（南から）

⑽ 保津（ほつ）・宮古（みやこ）遺跡 第26次調査

所 在 地　田原本町大字新町字上浅田190－21　　**調査面積**　290㎡
調査原因　分譲住宅の建築　　**担 当 者**　清水琢哉
調査期間　1999.10.29～11.26　　**遺 物 量**　14箱

位置・環境　今回の調査地は、保津・宮古遺跡の東端に位置する。南側隣接地では第13次調査が行われており、弥生時代後期末ごろの方形周溝、古墳時代後期の方墳が検出されている。特に後者は、羽子田古墳群と一連のものである。

検出遺構　弥生時代後期：土坑１基、方形周溝１基
古墳時代後期：方墳１基、墓壙？１基
中　　世：溝１条
中世～近世：土坑１基、素掘小溝多数

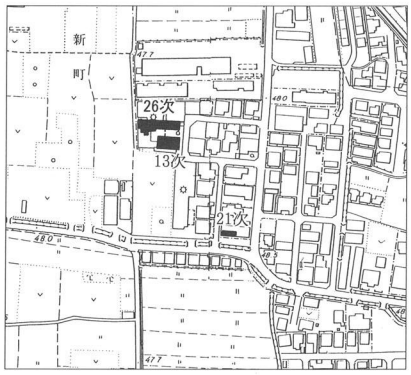
出土遺物　弥生時代の土坑や溝からは、後期後半の弥生土器片が少量出土したのみである。

古墳時代後期の方墳周濠からは埴輪や須恵器の小片が出土した。

中世とみられる溝内で埴輪片が密集する地区がみられた。５世紀前半から６世紀前半までの埴輪が混在しており、付近の古墳を削平した際に出土した埴輪を集めて投棄した可能性がある。埴輪には、円筒棺の破片も含まれている。また、この近くにはこの円筒棺の墓壙と考えられるものがあり、その内部および上面から碧玉製管玉８点、ガラス玉６点、琥珀製棗玉１点が出土した。

まとめ　今回の調査では、隣接する第13次調査で検出されていた方墳（羽子田11号墳）の周濠を確認した。これにより、古墳の規模は墳丘長11.5ｍ、全長14.5ｍと判明した。

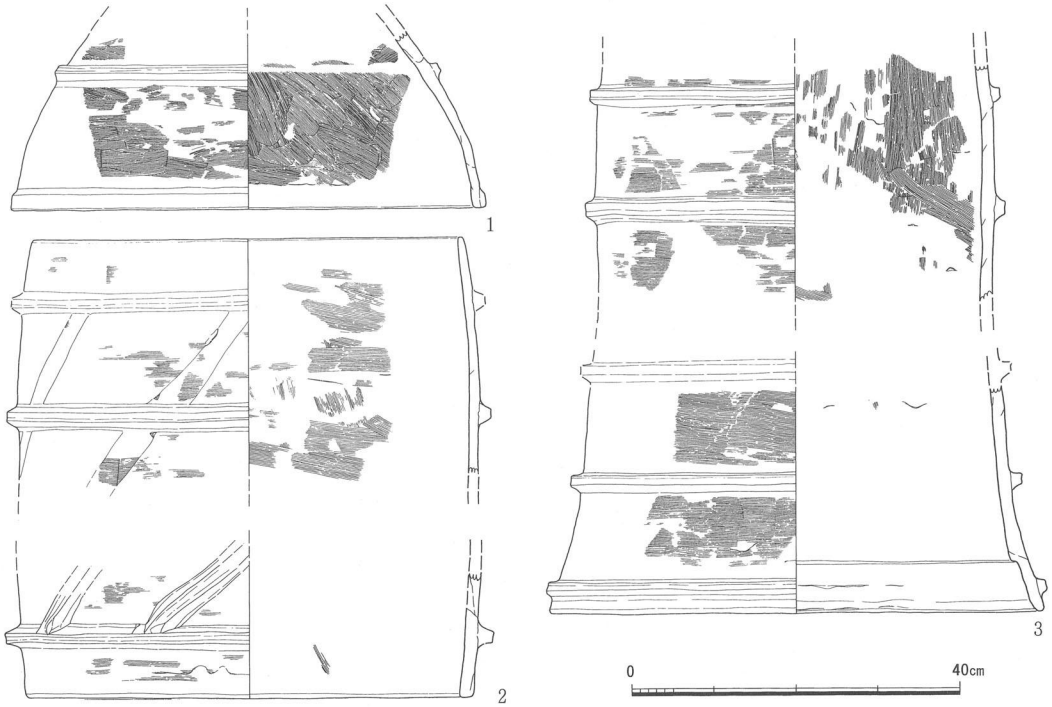
中世ごろの溝から出土した埴輪は、周囲に拡がる羽子田古墳群を削平した際のものである可能性が考えられる。そして、羽子田古墳群には円筒棺も存在することが明らかになった。



1．調査地点の位置　（1：5,000）

2．調査地全景（東から）

3．SD－103出土状況（南東より）



Column 7

保津・宮古遺跡
第26次

埴輪を利用した棺

調査区西端の中世溝などから、細片となった埴輪が密集して出土した。埴輪は数時期のものが含まれており、円筒埴輪、朝顔形埴輪、家形埴輪などがある。なかでも注目されるのが、円筒棺２個体分とその蓋１個体分である。

棺蓋は半球形を呈するもので、端部と中央にタガを有する。円筒棺には、斜位の突帯文様をもつタイプともたない２つのタイプがある。前者では、上端部はやや内傾ぎみで薄く、基底部はやや厚く作っている。後者では、やや外傾ぎみの基底部で内面に段をもっている。いずれの円筒棺も外面には横位ハケが施され、内面には赤色顔料の付着がみられる。

これらの埴輪は、一括投棄されている状況から一つの棺であった可能性が高い。出土地点の北東３ｍには長軸３ｍ、短軸２ｍの不整方形の土坑があり、土坑およびその周辺から管玉などの玉類が出土しており、埴輪棺を抜き取り周辺の古墳の埴輪などとともに投棄した可能性が高い。羽子田遺跡の第６次調査においても、埴輪棺片が出土しており羽子田古墳群の性格を考える上で重要である。

(11) 宮古北遺跡（みやこきた） 第9次調査

所 在 地　田原本町大字宮古字倉田395－1
調査原因　地下燃料タンク設置
調査期間　1999.5.25～6.1
調査面積　56㎡
担 当 者　豆谷和之
遺 物 量　1箱

位置・環境　宮古北遺跡は、保津・宮古遺跡の北西側に位置し、奈良市民生活協同組合および黒田池が遺跡範囲内に含まれている。従来、保津・宮古遺跡に一括されていたが、奈良市民生活協同組合配送センター建設、健康づくりセンター建築に伴う調査成果から、東南側の現宮古集落とは検出される遺構の時期および性格が異なるため、今年度調査から呼び分けるようになった。

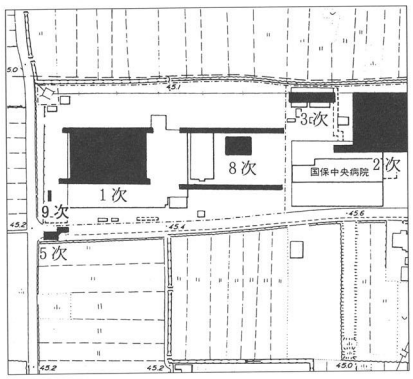
今回の調査は、奈良市民生活協同組合配送センター敷地内の西側、地下燃料タンク設置に伴うものであった。配送センター建築に伴う第1次調査では布留式(古)の弧を描く2条の溝を検出しており、本調査区はその溝に対して内側の位置にあたる。

検出遺構　古墳時代前期：溝4条、土坑2基、柱穴

出土遺物　今回の調査で検出した遺構は、溝4条と土坑2基、柱穴である。このうち2条の溝には、布留式（古）土器片が含まれていた。また、土坑2基のうち1基は、井戸と考えられる。他の遺構には、時期を決定できるような遺物は含まれていなかった。

また、遺物包含層中より、縄文時代晩期の凸帯文土器片を検出した。数量的に多くはないが、周囲に縄文時代晩期集落の存在を予想させた。

ま と め　第1次調査に引き続き、布留式(古)の遺構を検出した。遺物が少ないため時期決定が不可能な柱穴も、堆積土の色調から同時期と考えられる。第1次調査の2条の溝が区画溝とするならば、本調査区は集落内部にあたるのであろう。



1．調査地点の位置　（1：5,000）

2．調査地全景（北から）

3．柱穴断面

(12) 宮古北遺跡（みやこきた） 第10次調査

所 在 地　田原本町大字宮古529－1南側水路他　**調査面積**　230㎡
調査原因　農業用水路の改修　**担 当 者**　清水琢哉
調査期間　1999.12.1～12.16　**遺 物 量**　5箱

位置・環境　今回の調査地は、宮古北遺跡の南東部に位置する。北西50mでは京奈和自動車道建設に伴い第7次調査が行われており、古墳時代前期の集落、古代の掘立柱建物跡が検出されている。ただし、西側隣接地の試掘調査では中世素掘小溝が検出された程度である。

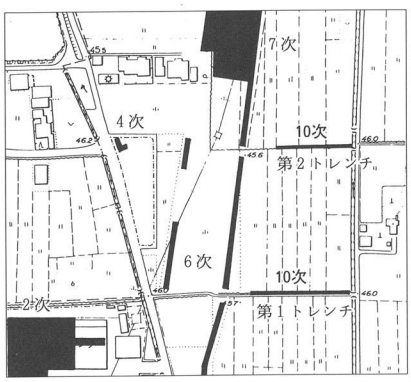
検出遺構　縄文時代～弥生時代？：土坑3基、河川跡1条

古代：小溝1条
中世：素掘小溝多数
近世：野井戸8基

出土遺物　中世素掘小溝から少量の須恵器・瓦器片が出土したにすぎない。なお、縄文時代とみられる土器小片1点が土坑中から出土している。

ま と め　今回の調査では、南側の第1トレンチでは中世素掘小溝以外に顕著な遺構は検出することができなかった。一方、北側の第2トレンチでは、調査区西側で縄文時代とみられる小土坑3基を検出している。これらの遺構がどのような性格のものであるのか、今後検討していく必要がある。

この第2トレンチでは、古代ごろの小溝が1条検出されている。東西方向で何らかの区画溝である可能性も考えられるが、古代の遺構密度は低く、本体は西側であろう。今後、周辺の調査を進めることで遺跡の範囲は、明らかになっていくであろう。



1．調査地点の位置　（1：5,000）

2．第1トレンチ全景（東より）

3．第2トレンチ全景（西より）

(13) 笹鉾山古墳 第2次調査

所 在 地 田原本町大字八尾259－1東側里道他　**調査面積** 163㎡
調査原因 道路整備　**担 当 者** 藤田三郎
調査期間 1999.11.18～2000.1.18　**遺 物 量** 20箱

位置・環境　笹鉾山1号墳は、標高47mの沖積地に立地する。現在は、水田の中に東向きの前方後円墳（1号墳）が1基存在するのみで、他の古墳は既に削平を受け、埋没している。1号墳は、北側に濠の痕跡を一部残すが、他の部分は水田となっている。また、墳丘には稲荷神社と社務所が設けられている。

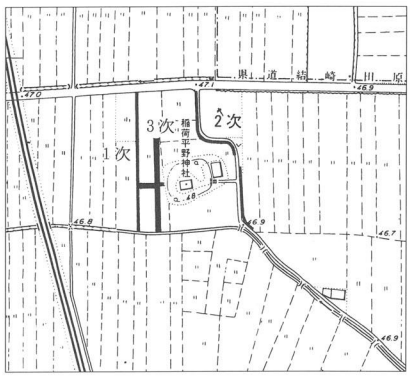
第1次調査では、前方後円墳の西側20mで、1号墳の外濠と直径20mの埋没円墳を検出した。今回の調査は、道路整備に伴うもので1号墳の前方部周濠部分を南北2カ所調査した。

検出遺構　古墳時代前期：土坑1基
古墳時代後期：1号墳二重周濠
中世・近世：河川跡・素掘小溝群

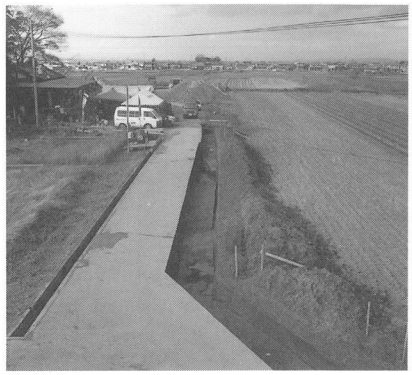
1号墳の2重周濠を第1・2トレンチの2カ所において検出した。内濠は、中堤側の肩ちかくの斜面を直線的に検出したのみで、内濠の全容は不明である。外濠は、第1トレンチでは、幅約6.5m、深さ0.8mの規模を有するが、第2トレンチでは削平を受けているためか幅3.2m、深さ0.5mしかない。河川跡は、第1トレンチの東南端で検出したが、調査区外に拡がる。

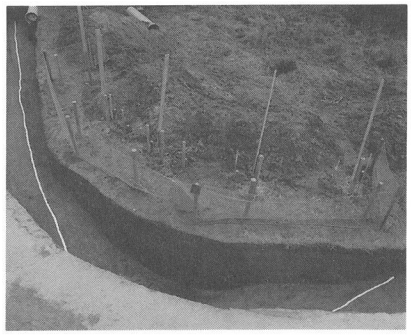
出土遺物　内濠からは円筒埴輪やほぞ穴のあいた建築材、板材、曲柄又鍬が出土した。土器は、古墳時代後期の須恵器のほか奈良時代の須恵器も周濠の上層には含まれている。また、第2トレンチでは、それら遺物に混在するかたちで弥生時代後期後半の土器が出土した。

ま と め　今回の調査で前方部の内濠各コーナーちかくを検出し、内濠の幅は約46mとなった。また、外濠も確認したが、前方部前面側は未調査で、全長をおさえる上で今後の課題である。



1．調査地点の位置　（1：5,000）


2．調査地全景（第1トレンチ）（南から）


3．SD－2101内濠（第2トレンチ）

写真右が北

Column 8

笹鉾山古墳
第2次

二重の周濠をもつ前方後円墳

田原本町は、奈良盆地の中央部の沖積地に位置するため、目立った古墳は存在しない。これまで三宅古墳群の南端に存在する黒田大塚古墳が低地部の前方後円墳として重要な位置を占めていた。今回の笹鉾山1号墳の第2・3次調査によって、この古墳が黒田大塚古墳に次ぐ前方後円墳であることが判明した。

墳丘全長は約48mで、二重周濠を有する全長約96mの古墳であることが明らかになった。後円部側の内濠は幅9m、深さ1.4mを測る。中堤は幅7m。外濠の規模は後円部の北側と南側では、幅2.8〜5.4m、深さ0.3〜0.5mと異なっている。

埴輪は、墳丘及び中堤から転落した状態で出土しており、円筒埴輪・家形埴輪がある。内濠から曲柄又鍬（2次）、笊・鎌柄・用途不明木製品（3次）など様々な木製品が出土した。内濠の埋没は、奈良時代である。

本古墳は、出土した須恵器から最も古く考えると5世紀末になるが、円筒埴輪等他の出土遺物からもう少し新しくすることも可能となろう。しかしながら、黒田大塚古墳の一段階前の古墳として位置づけられるであろう。

⑭ 笹鉾山古墳 第３次調査

所 在 地　田原本町大字八尾258－1・259－1　　**調査面積**　291㎡
調査原因　範囲確認調査　　**担 当 者**　藤田三郎
調査期間　1999.11.22～2000.2.4　　**遺 物 量**　25箱

位置・環境　笹鉾山１号墳は、東向きの前方後円墳である。第１次は後円部側の西側20ｍ地点、第２次は前方部側で調査を実施し、各調査で周濠等を検出している。

今回の調査は、範囲確認調査である。後円部側の周濠規模と遺物の埋没状況、時期を確認することを目的とし、南北72ｍと東西約17ｍの２つのトレンチを設定した。

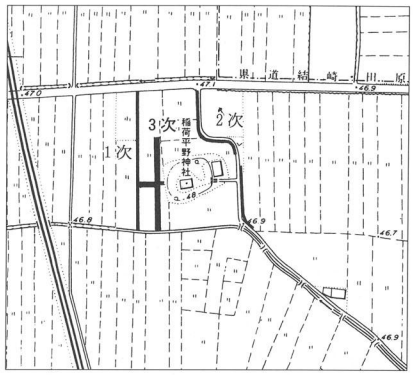
検出遺構　古墳時代後期：古墳周濠２条、溝２条
奈 良 時 代：土坑２基
中　　世：素掘小溝

調査では、後円部側の円弧に沿うように内濠と外濠を検出した。内濠は、幅９ｍ、深さ1.4ｍを測る。外濠は３カ所において検出したが、削平を受けているためか規模が異なる。幅2.8～5.4ｍ、深さ0.3～0.5ｍである。主軸上での中堤の幅は７ｍを有する。

１号墳周濠のほか調査区北端で古墳時代の幅2.2ｍほどの溝２条、南端で奈良時代の土坑２基を検出した。そのうちの１基は外濠内に掘削され、井戸と考えられる。

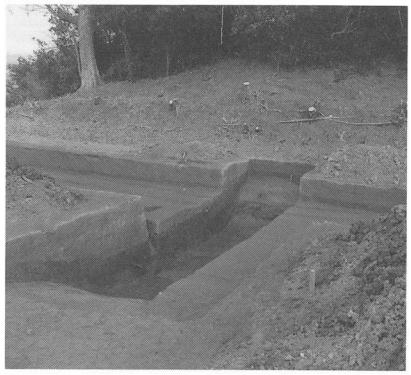
出土遺物　１号墳の二重周濠から円筒埴輪・須恵器・土師器・鎌柄などの木製品が出土した。南端で検出した外濠外側斜面には須恵器坏身・坏蓋・横瓶・壷、土師器甕の半完形品がまとまって出土した。

ま と め　今回の調査によって、１号墳が二重に周濠を巡らす前方後円墳であることが判明した。周濠を含めた全長約96ｍ、墳丘48ｍを有する。周濠は奈良時代に埋没した。また、奈良時代の墨書土器や緑釉陶器などの遺物を含む遺構を検出しており、荘園関係の遺跡が重複している可能性もでできた。



1．調査地点の位置　（1：5,000）

2．調査地全景（南から）


3．SD－101内濠（南西から）

Column 9

笹鉾山古墳
第３次

古墳を祀る

笹鉾山１号墳の第３次調査は、後円部側の周濠の調査である。南北と東西の２つの調査区を設定し、二重周濠を各調査区において検出した。内濠では、墳丘や中堤に樹立していたであろう円筒埴輪などが転落した状態で出土した。これに対して、外濠では埴輪などの遺物の出土は少なく、外濠付近は閑散とした状況であったようだ。このような内と外での違いのなか、外濠の外側、後円部の南西部において須恵器などの土器が集中する地点があった。

土器群の内訳は、須恵器の大甕・壷・横瓶・坏蓋身、土師器甕で、これらが外濠の外斜面から転落したような状況で出土したのである。また、第１次調査においても外濠の南端において内面に朱が付着した大甕の破片が出土しており、これらから古墳の南西部、外濠の外側において古墳祭祀が実行されていたことが判明した。ただし、この祭祀は古墳が築造されてから数十年も経た６世紀後半であることから、長期にわたって本墳が大切に祀られていた状況が見て取れるのである。

(15) 羽子田（はごた）遺跡 第17次調査

所 在 地　田原本町字織田垣内369－1、2、3
調査原因　個人住宅の建築
調査期間　1999.11.15～11.16
調査面積　30㎡
担 当 者　豆谷和之
遺 物 量　1箱

位置・環境　今回、田原本町役場の西側、住宅の密集する地区で個人住宅の建築が計画された。この場所は、羽子田遺跡の東端にあたり、近世を主体とする寺内町遺跡とその境を接する。羽子田遺跡は、その範囲に後期古墳群を包括するが、本調査地は周辺の調査データーによれば古墳群の中心からはずれていることが予想された。調査前の地主聞き取りによって、本調査地には昭和30年代まで大きな池のあったことが判明している。

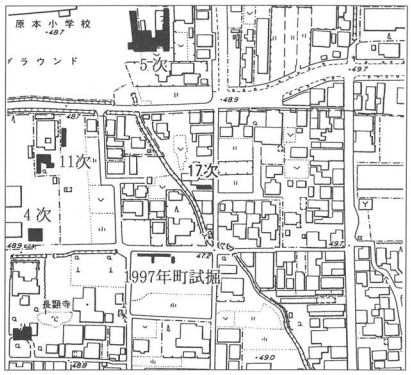
検出遺構　近世：溝１条、大形土坑１基

調査前の地主聞き取り通り、地表の客土直下には池埋土と考えられる多量の木材、ゴミを含んだ暗青灰色粘土層があった。この暗青灰色粘土層下で、溝１条、大形土坑１基を検出した。大形土坑は、ほとんど遺物を含んでいないが、溝に切られていた。

出土遺物　溝からは、肥前系染付碗が出土している。大形土坑も中層から、肥前系染付碗が出土した。

ま と め　江戸時代の溝１条と大形の土坑１基を検出した。大形の土坑は、ほとんど遺物を含んでおらず、その状況から粘土採掘坑の可能性が考えられる。これまでにも羽子田遺跡の付近では、瓦などの粘土採掘坑が多数検出されている。

溝は現行道路に沿ったもので、道路側溝の可能性がある。ただし、「寛永５年」の陣屋周辺を描いたとされる古絵図では、本地は「田」と記述され、道の表現はない。周辺の調査を継続し、資料の蓄積を待ちたい。



1．調査地点の位置　（1：5,000）

2．調査地全景（西から）

3．部分深掘り（東から）

(16) 十六面（じゅうろくせん）・薬王寺（やくおうじ）遺跡 第16次調査

所 在 地　田原本町大字十六面字ハス田122－1
調査原因　個人住宅の建築
調査期間　2000.1.25～2.2
調査面積　60㎡
担 当 者　清水琢哉
遺 物 量　1箱

位置・環境　十六面・薬王寺遺跡は、飛鳥川の東岸、標高約46ｍ前後の沖積地に立地する。

今回の調査地は、遺跡の北西端にあたる。東側200ｍで行われた第13次調査では古代の水田が検出されているほか、その東側の第1次調査では弥生時代の集落も検出されている。

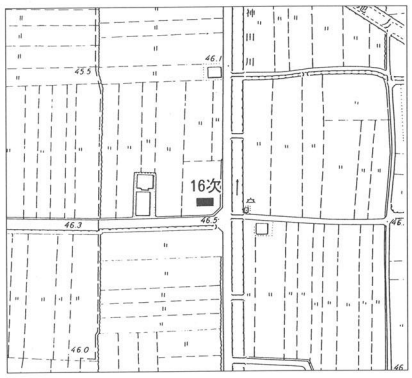
十六面・薬王寺遺跡第13次調査などで検出されている水田遺構は、古代ごろの洪水堆積である砂層に覆われて遺存している。今回の調査でも、同様の水田遺構が検出される可能性が考えられていた。

検出遺構　弥生時代：土坑1基、落ち込み、小溝1条
中　　世：粘土採掘坑1基、素掘小溝多数
近　　世：素掘小溝多数

出土遺物　弥生土器、土師器、須恵器、瓦器

まとめ　今回の調査では、中世素掘溝による破壊が激しく、古墳時代後期～古代の水田遺構は明確に確認できなかった。水田の可能性のある粘質土層は、部分的に残されるのみであった。なお、この粘質土層には庄内式ごろの土器片が包含されていたが、これがこの層の形成期を示すものかどうかは明らかでない。むしろ、周囲で検出されている水田遺構の時期から、古墳時代後期以降のものである可能性を考える必要があろう。

また、弥生時代の遺構密度は低く、集落の中心からは外れているようである。調査区東端で弥生時代後期ごろの土坑1基が検出されているものの、調査地全体が落ち込みとなっており、弥生時代の集落は本調査地よりも東側に拡がると考えられる。



1．調査地点の位置　（1：5,000）

2．調査地全景（中世）（西から）

3．調査地全景（弥生）（東から）

(17) 薬王寺東遺跡（やくおうじひがし） 第２次調査

所 在 地　田原本町大字薬王寺字明世定58
調査原因　共同住宅の建築
調査期間　1998.５.17～５.31
調査面積　195㎡
担 当 者　清水琢哉
遺 物 量　１箱

位置・環境　薬王寺東遺跡は、薬王寺集落の東側、標高48ｍ前後の沖積地に拡がる。また、遺跡の西側に接して筋違道（太子道）が北北西－南南東方向に延びる。

今回は、遺跡北西端での調査である。西側隣接地で行われた第１次調査では、筋違道の西側側溝とみられる奈良時代ごろの溝を検出している。このことから、本調査地では筋違道の東側側溝が検出される可能性が考えられた。

検出遺構　古墳時代：落ち込み
古　　代：水田？、溝（SD－101）

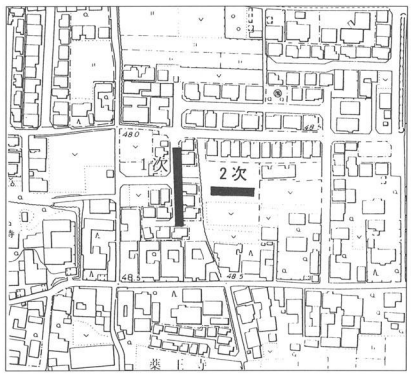
調査地全体が古墳時代後期の落ち込みである。SD－101は、調査区の西端で検出した北北西－南南東方向の浅い溝である。古墳時代の落ち込み埋没後に掘削される。東肩のみの検出であり、幅は明らかでない。遺物は出土していないが、検出層位から飛鳥時代前後の遺構と考えられる。

古代の水田？では、調査地西半を中心に、人と牛とみられる足跡を検出した。遺物が少ないため時期決定は困難であるが、第１次の調査成果から飛鳥時代前後の遺構とみられる。

出土遺物　土師器、須恵器、瓦器

古墳時代の落ち込みでは、下層から５～６世紀ごろの土師器甕小片が出土している。

ま と め　今回の調査では、筋違道の方向と一致する古代の溝を検出したが、その規模を明らかにすることはできなかった。第１次調査で検出した遺構と比較すると、溝の深さ・埋土・検出層位が異なる。このことから、今回検出された溝は、第１次調査の溝より１段階前の筋違道側溝である可能性が考えられる。



1．調査地点の位置　（1：5,000）

2．調査地全景（西から）

3．SD－101完掘状況（北から）

(18) 常楽寺推定地（じょうらくじすいていち） 第4次調査

所 在 地　田原本町大字宮古字寺北288－2、－4
調査原因　共同住宅の建築
調査期間　1999.10.25～10.28
調査面積　48㎡
担 当 者　清水琢哉
遺 物 量　1箱

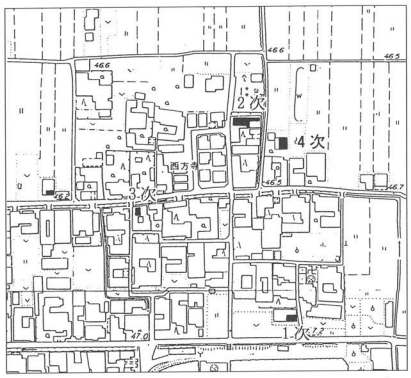
位置・環境　常楽寺推定地は、標高46m前後の沖積地に立地する。現在の宮古集落東部を中心に「寺垣内」「寺北」「寺東」「寺西」「大門」の小字名があり、これが中世の文献史料『三箇院家抄』の中にみえる「常楽寺」に該当するとみられている。また、「寺垣内」には薬師如来座像（平安初期・重要文化財）を納める薬師堂がある。この他、「寺東」にはかつて宝篋院塔を建てた小墳丘があり、そこからは土製の小塔（泥塔）が多数出土している。

今回の調査は、常楽寺推定地の北端で行った。北西側隣接地で行われた第2次調査では、13世紀ごろの東西方向の大溝、近世の南北方向の大溝などが検出されている。このことから、本調査地でも中・近世の遺構の分布が予想されていた。

検出遺構　近世ごろの旧水田耕土を除去すると、中・近世の素掘小溝が検出された。

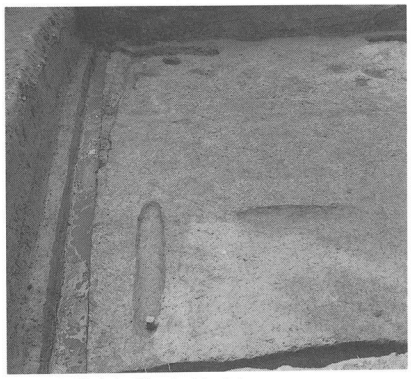
出土遺物　素掘小溝から若干の瓦器片などが出土した。また、粘質土堆積層から近世の陶磁器類が出土した。

ま と め　北西側隣接地で13世紀ごろの大溝や近世の南北方向の溝等が検出されていたにもかかわらず、今回の調査では明確な遺構が検出されなかった。このことから、第2次調査で検出された近世大溝が遺跡の東端を示すものと考えられる。



1．調査地点の位置　（1：5,000）

2．調査地全景（西から）


3．中世素掘溝（西から）

(19) 法貴寺斎宮前遺跡（ほうきじさいぐうまえ） 第２次調査

所 在 地　田原本町大字法貴寺893－1北側水路　**調査面積**　200㎡
調査原因　農業用水路の改修　**担 当 者**　豆谷和之
調査期間　1999.12.10～12.11　**遺 物 量**　１箱

位置・環境　法貴寺斎宮前遺跡は、標高50ｍ前後の沖積地に立地する。初瀬川の西岸に位置し、周辺には法貴寺遺跡、法貴寺丹波山遺跡、法貴寺舞ノ庄遺跡などがある。いずれも中・近世を中心とする遺跡である。

法貴寺斎宮前遺跡の第１次調査は、昭和63年度に斎宮神社の西隣接地で行い、平安から室町時代にかけての遺構、遺物を検出している。遺構には根石を伴う柱穴があり、建物が想定される。また、遺物には平安時代の木製枡がある。斎宮神社の創建は江戸時代以前に溯り、その前身は斎宮寺とされる。

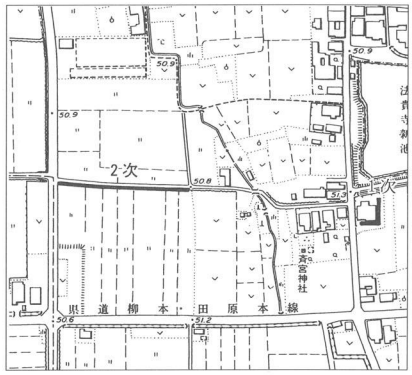
今回の調査地は、斎宮神社の西側水田であり、遺跡中心からはやや外れるものと考えられた。

検出遺構　中世以前：河川跡
中　　世：素掘小溝

中世遺物の包含層となる灰色粘土層の下で、河川跡を検出した。調査区のほとんどが河川堆積内となり、その河幅は不明である。上面からは、摩耗した弥生時代後期土器片が出土している。この河川跡の西肩で、素掘小溝を検出した。摩耗した瓦器椀が含まれていた。

出土遺物　弥生時代から中世の土器小片。

ま と め　本調査地で検出された河川跡は、幾度も流路方向を変化させ、その幅は90ｍを越えている。斎宮神社東側の第１次調査地が、中世居住域となる微高地であったのに対し、西側の第２次調査地は低地となる。河川跡の上面で検出した灰色粘土層が、中世水田層の可能性も考えられる。



1．調査地点の位置　（1：5,000）

2．調査地全景（西から）

3．素掘り溝完掘状況（南から）

⑳ 富本（とんもと）遺跡 第１次調査

所 在 地　田原本町大字富本192
調査原因　農業用倉庫の建築
調査期間　1999.6.9～6.11
調査面積　34㎡
担 当 者　清水琢哉
遺 物 量　１箱

位置・環境　富本遺跡は、飛鳥川の東岸、標高約45ｍ前後の沖積地に立地する。富本集落の東側、富都神社を含む東西200ｍ、南北270ｍが遺跡の範囲と考えられるが、発掘調査が行われる機会がこれまでなかったため、遺跡の内容については不明である。

富都神社は、延喜式内社に比定される古社であるが、境内の石灯籠には「牛頭天王」の銘が刻まれており、神仏分離以前は牛頭天王を祀っていたと考えられる。

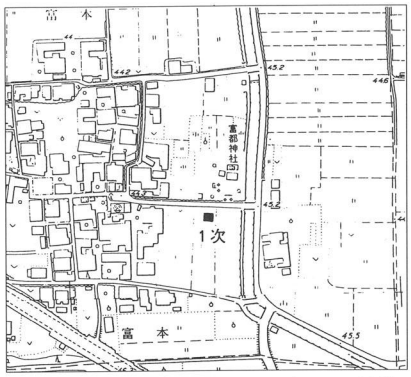
今回の調査は、遺跡の南端、富都神社の南側隣接地で行った。その位置から、神社に関連する遺構が検出される可能性が考えられた。

また、調査地の南側隣接地には奈良時代の古代道路推定地があり、道路側溝等の関連遺構が検出される可能性も考えられていた。

検出遺構　中世～近世の素掘小溝、土坑などが検出された。小溝からは瓦器片が出土するが、近世磁器が含まれていないので、中世のものである可能性が考えられる。土坑はいずれも深さ0.2ｍ弱で、平面形は長方形を呈する。

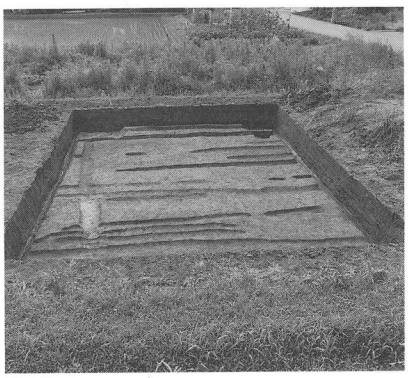
出土遺物　土師器、瓦器

ま と め　今回の調査では、耕作に伴うとみられる小溝と小土坑が検出されるにとどまった。遺物が少ないため時期決定は困難であるが、層序から鎌倉時代～室町時代ごろの可能性が考えられる。なお、富都神社関連の遺構については検出することができなかった。



1．調査地点の位置　（1：5,000）

2．調査地全景（南から）


3．調査地全景（東から）

(21) 金剛寺遺跡 第5次調査

所 在 地 田原本町大字金剛寺字阿弥陀院
435－1－1、435－1－3、435－2－1

調査原因 個人住宅の建築

調査期間 1999.7.1～7.5

調査面積 35㎡

担 当 者 清水琢哉

遺 物 量 1箱

位置・環境 金剛寺遺跡は、標高46m前後の沖積地に立地する。第4次までの発掘調査では、古墳時代の溝と住居跡、古代の河川跡、中世「金剛寺城」関係の遺構が検出されている。今回は現金剛寺集落の南西端地の調査である。その位置から、城の西側の区画施設が検出される可能性が考えられた。また、今回の調査地の小字名は「阿弥陀院」であり、明治7年に廃寺になった「阿弥陀寺」の関連遺構、遺物が検出される可能性があった。

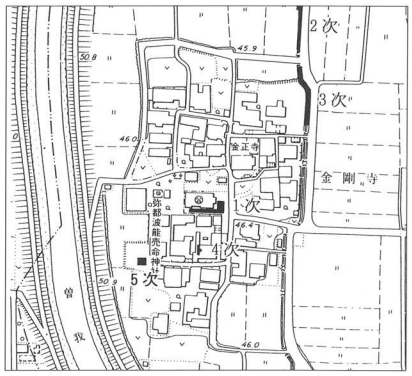
検出遺構 調査地は、厚さ約1mの客土で造成されていた。その下0.3mは旧水田層で、これらを除去するとベース層である黄褐色粘質土層が拡がる。中世～近世の遺構は、全てこの黄褐色粘質土層上面で検出された。

SD－51は、調査区東端で検出された南北方向の溝で、西肩のみの検出となった。深さ0.7mまで確認したが、さらに深くなると考えられる。遺物がほとんど出土していないため、時期決定は困難である。埋土の状況から、中世の可能性が考えられる。

近世の遺構は、東西方向を主体とする素掘小溝群のみである。

出土遺物 土師器、近世陶磁器など

ま と め 今回の調査の結果、「金剛寺城」西側を区画すると考えられる溝が検出された。しかし、調査区が狭小で、東側には住宅が接して建てられていたため、遺構の規模や時期を確認することはできなかった。今後の調査により確認していく必要がある。



1．調査地点の位置 （1：5,000）

2．調査地全景（西から）

3．SD－51完掘状況（南から）

(22) 田原本寺内町遺跡 第5次調査

たはらもとじないちょう

所 在 地　田原本町字坊ヤシキ325、326
調査原因　個人住宅の建築
調査期間　1999.6.14～7.1
調査面積　143㎡
担 当 者　豆谷和之・清水琢哉
遺 物 量　35箱

位置・環境　田原本寺内町遺跡は、標高49m前後の沖積地に立地する。中世の田原本には、寺川に接した字奥垣内を中心とする豪族居館跡、楽田寺の門前町、小室集落の3つの環濠集落が鼎立していたと考えられている。これらの環濠集落は、近世初頭に成立した教行寺による田原本寺内町、平野氏による陣屋に取り込まれ、田原本の町場を形成していった。

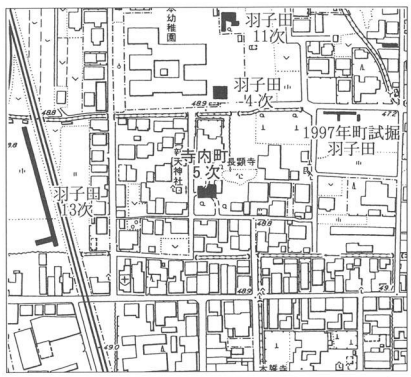
今回は、小室環濠集落内部での調査である。周辺での調査で中世大溝を検出しているが、小室集落内部での調査はこれが初めてとなる。

検出遺構　12～13世紀：素掘小溝
14～16世紀：井戸5基、溝2条、建物跡
17～19世紀：土坑5基、井戸1基、溝3条、建物跡

出土遺物　土師器、須恵器、瓦器、瓦質土器、木製品（曲物など）、陶磁器など

ま と め　今回の調査では、14世紀～近世までの建物跡と多数の井戸を検出し、本地が屋敷地として長期にわたって利用されていたことが明らかとなった。特に江戸時代においては、調査地南半に柱穴、北半に井戸という配置から、本調査地で検出された建物が門屋となり、調査地の北側に想定される主屋との間に井戸が掘削されていたと推定できる。

14世紀に屋敷地としての土地利用が始まる前は、中世の素掘小溝が検出されていることから、耕地として利用されていたと考えられる。また、未調査であるが、古代に溯る遺物も多く検出されている。下層遺構面では古代の遺構が存在する可能性が高い。



1．調査地点の位置　（1：5,000）

2．調査地全景（東から）

3．SK－07瓦質井戸枠検出状況（南から）

(23) 平野氏陣屋跡（ひらのしじんやあと） 第11次調査

所 在 地　田原本町大字新町字藤原269－2
調査原因　個人住宅の建築
調査期間　1999.4.28～4.30
調査面積　6㎡
担 当 者　清水琢哉
遺 物 量　1箱

位置・環境　平野氏陣屋跡は標高50m前後の沖積地に立地する。近世に田原本を領した平野氏の陣屋跡である。中世豪族田原本氏の居館跡を利用して陣屋を造営したとされる。近年の調査でも、室町期の大溝が陣屋の大溝の内側に存在することが判明している。

今回の調査地は、陣屋の範囲からはやや北にはずれるが、絵図によると宅地が描かれている箇所に相当する。このため、近世の遺構が検出されることが予想された。

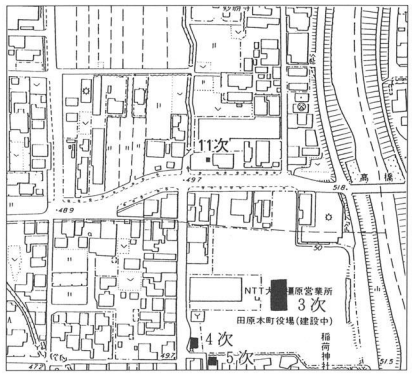
検出遺構　中世：溝3条
近世：溝1条

SD－01は、深さ0.5mの東西方向の溝である。北側の肩が調査区外に拡がるため、溝幅は明らかでない。中世の遺構とみられる。

SD－03は、SD－01に切られる南北方向の溝である。東肩のみの検出であり、幅は明らかでない。深さ0.6mを測る。中世の遺構とみられる。

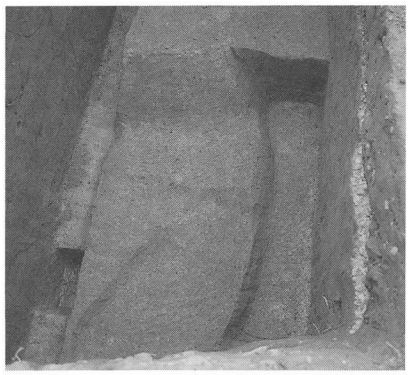
出土遺物　中世の遺構から、瓦器椀、土師皿、土師質羽釜などが出土した。12～13世紀ごろとみられるが、小片のみであり、詳細な時期決定はできなかった。

ま と め　今回は、狭小な面積の調査であったため、遺構の性格や時期が明確にできなかった。検出された遺構の多くは中世のもので、陣屋や居館の造営される以前の遺構と考えられる。鎌倉時代の遺構は、これまで第10次調査で井戸が、第6次調査で墓が検出されるなどの成果がある。今後の調査により、鎌倉時代の集落形態や範囲を確認していく必要がある。



1．調査地点の位置　（1：5,000）

2．SD－01完掘状況（北から）


3．SD－03完掘状況（北から）

⑵④ 平野氏陣屋跡（ひらのしじんやあと） 第12次調査

所 在 地　田原本町字奥垣内830－2、831－3
調査原因　個人住宅の建築
調査期間　1999.11.17～11.18
調査面積　16㎡
担 当 者　豆谷和之
遺 物 量　1箱

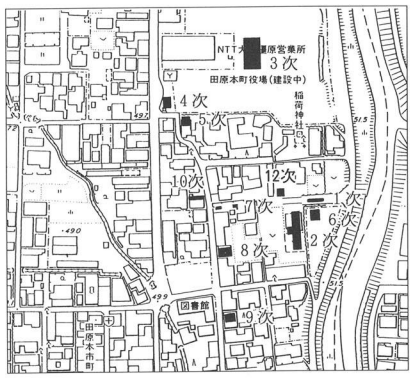
位置・環境　今回の調査地は、古絵図によれば平野氏住居の北側道路あるいは家臣屋敷にあたるものと考えられた。周辺では、第1・2・6・7次調査が行われている。第2・6次調査では、古絵図に描かれた、平野氏住居と道路を区画する大溝を検出している。本調査地は、この第2・6次調査地と現行道路を挟んで向かい合っており、平野氏住居周辺の状況がより明らかになるものと思われた。

検出遺構　江戸時代：大溝1条

調査区全体が、大溝のなかであった。このため大溝の規模は不明である。大溝は東西方向に軸をもち、2段掘りであった。この大溝は、古絵図に表現されていない。

出土遺物　大溝の下層からは、肥前系の染付碗などが出土している。

ま と め　今回の調査では、古絵図にない江戸時代の大溝を検出した。古絵図にない江戸時代の大溝は第10次調査においても確認している。この点に関しては、ふたつの解釈が可能である。ひとつは、古絵図において表現されたのは主要水路であり、道と屋敷地を区画する大溝は表現されなかったとする考え。もうひとつは、「旧縣廳」の記述をもつ古絵図（明治作成か？）作成以前に、大溝は埋没していたとする考えである。ただし、地元の聞き取りによれば、溝は沼地状となって戦前まで痕跡を止めていたようである。事実、発掘調査においても、溝の最上層でガラス片が出土している。後者の考えは成り立たない。おそらく、道と屋敷地を区画する大溝は古絵図に表現されなかったのであろう。



1．調査地点の位置　（1：5,000）

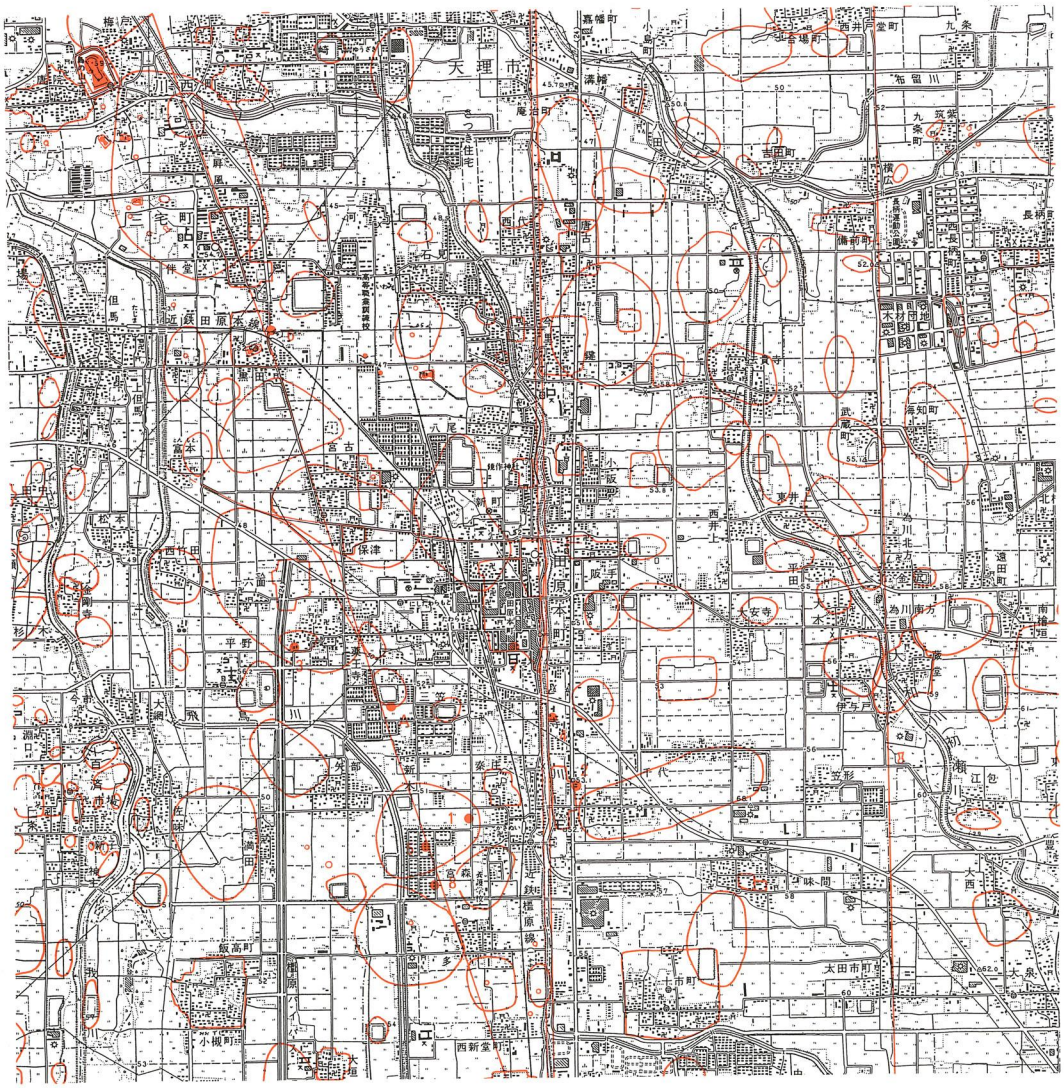
2．調査地全景（北から）

3．西壁断面（北東から）

Ⅲ．試掘調査・立会調査の概要

1999年度に田原本町の行った試掘調査は、薬王寺南遺跡の１件である。２ｍ×２ｍの試掘坑で遺構の有無と層序の確認を行ったが、調査地全体が中世ごろの氾濫原とみられ、素掘小溝以外の明確な遺構・遺物を確認するには至らなかった。

1999年度に行った立会調査は８件である。このうち、２～５・８は客土内の掘削にとどまるため、遺構の有無を確認できるまでには至らなかった。１の秦庄遺跡では、中世素掘小溝が検出されたものの顕著な遺構はみられなかった。７の田原本寺内町遺跡では、試掘坑でベース層まで確認したが、遺構・遺物は確認されなかった。東側隣接地で行われた寺内町遺跡第２次調査と同様に遺構密度の低い地点である可能性が高い。



田原本町の遺跡と試掘・立会調査地点

第3表　1999年度　試掘調査一覧

番号	遺跡名	調査地	原因者	工事の目的	進達番号（田教文発）	進達日	調査日	内容
A	薬王寺南遺跡	田原本町薬王寺185、186、187	オネストホーム住宅流通㈱	分譲住宅建築	3	99. 4. 23	99. 6. 2	2m×2mの試掘坑を設定。深さ2mまで掘削。中世の氾濫原か。

第4表　1999年度　立会調査一覧表

番号	遺跡名	調査地	原因者	工事の目的	進達番号（田教文発）	進達日	調査日	内容
1	遺物散布地（県遺跡地図11－C－047）	田原本町秦庄76－1	秦　重信	農業用倉庫の建築	7	99. 5. 10	99. 5. 25	擁壁工事時に立会。深さ約50㎝で暗灰褐色粘土のベース層を確認。素掘溝のみで顕著な遺構・遺物はみられない。
2	日光寺推定地	田原本町千代848－3他	矢本和子	店舗の建築	15	99. 8. 3	99. 9. 14	建築予定地に1.5×0.5mの試掘坑を設定。工事掘削予定の1mまで掘り下げた。深さ0.88mまでは客土で、掘削は旧水田耕土層にとどまる。
3	薬王寺推定地	田原本薬王寺385－1	佐々木邦雄	個人住宅の建築	19	99. 9. 6	99. 9. 22	基礎掘削時に立会。客土内にとどまる。
4	下ッ道	田原本町千代366－1他	藤岡年秋	分譲住宅の建築	20	99. 9. 6	99. 12. 14	擁壁基礎掘削予定部分で試掘。工事掘削予定の1mまで掘り下げたが、客土内にとどまる。
5	遺物散布地（県遺跡地図11－C－047）	田原本町新木1－78	後藤淑郎	個人住宅の建築	30	99. 11. 11	00. 2. 14	基礎掘削時に立会。客土内にとどまる。
6	黒田遺跡筋違道	田原本町黒田449－5	柿本成也	個人住宅地の建築	36	00. 1. 19	00. 2. 18	立会の時点ですでに工事が進行していたため、調査不能。
7	田原本寺内町遺跡	田原本町53	松田　明	個人住宅の建築	28	99. 11. 8	00. 2. 25	1×0.3mの試掘坑を設定。深さ0.6mに旧地表面あり。客土内や遺構面での遺物の散布は少ない。
8	遺物散布地（県遺跡地図11－C－047）周辺	田原本町宮森100－9	野村　忠	個人住宅の建築	35	00. 1. 5	00. 3. 27	基礎掘削時に立会。客土内の掘削にとどまる。

田原本町埋蔵文化財調査年報 9
1999年度

平成12年 3 月31日

編集発行　田原本町教育委員会
印　　刷　明新印刷株式会社